

# カリフォルニア日本人教会の形成とE・A・ストージ

——一九一〇年代の教会合同問題を中心に——

吉 田 亮

はじめに

## 問題

ストージを取り上げる理由

一、日本人教会のリーダーシップの有りよう

(一) 教会と教派との関係

(二) 日本人年会とアメリカ人教役者

(三) 基督教伝道団とアメリカ人教役者

(四) 教会内でのリーダーシップ (アメリカ人教役者と日本人教役者)

(五) 日本人クリスチャンのアメリカ人教役者に対する評価

二、ストージの教派協力 (合同) 論

三、伝道団とストージ

四、教会合同とストージ

(一) 米国日本人基督教教会

(二) 在米日本人基督教教会同盟

むすび

## は　じ　め　に

### 問　題

本研究は、アメリカ人教役者がカリフォルニア日本人教会の形成・展開にどのように影響をおよぼしたのかを明らかにすることによってキリスト教と民族性の議論を検討する試みの一つである。すでに別稿において、「世紀転換期」のアメリカ・プロテスタントは日本人移民のキリスト教化、アメリカ化、同化を目指して日本人移民を熱心に教育し、自ら認ずるアメリカの良心として排日問題に抗し日本人を弁護したことを示した。<sup>(1)</sup>そして前稿で課題として残しておいたのはアメリカ・プロテスタントのこうした日本人伝道観が日本人クリスチャンにどのような影響を及ぼしたのかという問題であった。キリスト教と民族性の問題に照準するならば、アメリカ人教役者はどのくらい日本人移民の民族性の維持・保存に寄与したかということである。

キリスト教と民族性の関係を日本人キリスト教会史の場で考えるためには、当然日本人クリスチャンそのものを研究対象とするのが正当なアプローチであるといえよう。しかし筆者がアメリカ人教役者にこだわり、この対象を通じて問題に取り組もうとするにはそれなりに理由がある。つまり日本人キリスト教会の形成・展開にアメリカ人教役者(特に宣教師)が及ぼした影響力の大きさの故である。

あらゆる歴史がそうであるように、日系アメリカ人教会の変遷も様々な側面を見せてくれる。教会構成の主体となったのは日本人信徒であり、日本人牧師であつたらう。しかし、これらの人々の歩みを見守り、時には第一線に立つて日本人教会の形成・発展に尽力した一群の人々がいる。それは、M・C・ハリス(Merriman C. Harris)、H・B・ジンソン(Herbert B. Johnson)、E・A・ストージ(Ernest A. Sturge)に代表されるアメリカ人教役者達である。

まず日本人教会成立の過程に於いてアメリカ人教役者はホスト社会の各キリスト教教派から派遣された日本人伝道の責任者であった。形成途上にあった日本人社会の中で、各個教会の設立、維持には、アメリカ人教役者に依存しなければならぬ面があったであろうことは、容易に想像できる。時には彼らは実務や財政あるいは伝道方針そのものの決定権すら事実上掌握していた。また日本人社会が絶えず悩まされ続けた排日問題に対しても、日本人の代弁者、擁護者となってホスト社会に対する顔役として活躍した。さらには、日本人の師であり、親代りであり、カウンセラーとして日本人にとって無くてはならぬ存在として、愛され慕われ絶対的な信頼を得ていた。

そのことを示す資料はたくさんあるが、例えば、太平洋沿岸日本人長老教会総理 (Superintendent、監理とも呼ぶ) であるE・A・ストージが一九一五年に日本人を代表して「大正」天皇に聖書を献上するために日本を訪れた際、『渡米雑誌』(一九〇七年三月号)に「在米日本人の恩人ストージ博士小伝と肖像」(落機山人記)が掲載され、ストージを、

我が邦人の喜びは勿論、年来博士の愛顧を受けたるものは其新と旧とを問はず尽く博士の来遊を以て懐しき父母に再会せしの如き厚情を以て博士に接し……数カ月日本各地の実況を視察せらるゝ後「また遭ふ日迄」の歌に送られて桑港に帰られ自來南船北馬各地に出張して日本人の為に尽さるゝのみならず致々諒々として在桑港の同胞の為に尽さるゝ、同胞の排斥せらるゝや博士はジョソソソ博士等と力を協せて之が為に尽さるゝ事至れり尽せり、在米同胞の博士を父の如くに慕ふも又無理からぬ事と云はざるべからず……

と評した。また太平洋沿岸日本人メソジスト派ミッション総理のM・C・ハリスが勲三等の叙勲を受けたとき同誌(同号)は「在米日本人の父勲三等ハリス博士」(愛米学徒)という題の論説を載せている。その中でハリスについて「在米殊に太平洋岸の我が同胞の父、日本人の保育者」と讃える。そしてハリスが日本人を愛し、「一度桑港に上陸せし人にして殆んど博士の世話厄介にならざるは稀なりあらゆるものを挙げて博士はこれらの人々の為に尽されたり、誰一人として博士の厚き情を感じぬはなし宣なる哉太平洋岸の日本人にして一人として博士を愛敬せぬものなき事、博

士を其の慈父の如く慕はざるはなき事」と評している。ストージやハリスに対するこうした心酔ともいえる評価は当の日本人にとっては至って妥当な表現であり、日本人とこれらアメリカ人教役者との日常的な信頼関係を裏付けているものである。

なぜアメリカ人教役者が日本人にこれほどに信頼され、感化を与える事ができたのであろうか。先ず、草創期において日本人クリスチャンには、まだ一人歩きは困難であったからという指摘ができよう。日本人クリスチャンは宗教的には、ホスト社会のマジョリティに属していたが、人種・民族的にはマイノリティである。特に初期はそのコミュニティの力量は至って微弱で、教派からの援助無しには教会設立どころか集会の維持さえおぼつかない状況であった。必然的に教派が派遣しているアメリカ人教役者を頼る事になるのである。

アメリカ人教役者は常にホスト社会と日本人クリスチャンとの間に立つ仲介者のような立場にあった。彼らは、アメリカ文明をしょって立ち、これこそがその文明の心髄であると自ら認ずるクリスト教を日本人に伝えるという使命に燃えていた。その使命遂行の過程で、アメリカ人教役者達は、アメリカ社会が必ずしもクリスト教を體現していないことを痛感する事になる。即ち、日本人が受けている差別と排斥そしてアメリカ人教役者達の調停をはねのけてしまう社会の矛盾であり、その直中であって彼らは自らの「マージナル性」を実感し、ますます同じ境遇にある日本人クリスチャンのために尽力する。彼らは日本人を「クリスト教文明国」の本来的な一員とするために、又アメリカ社会を真の「クリスト教文明国」に立ち帰らせるために真摯に働いた。

こうした、アメリカ人教役者の心血を注ぐ働きは必ずしもホスト社会の変革を成し遂げたわけではなかったが、日本人クリスチャン達に彼らの努力を再認識させる事となる。日本人はアメリカ人教役者に他のアメリカ人とは違う何かを感じ、見失いかけたアメリカのクリスト教的良心を見る思いで、彼ら・彼女らを尊敬し、信頼したのである。そ

の信頼に応えるためにもアメリカ人教役者はますます努力を重ねていく。こうした相乗効果のようなものが働いて、アメリカ人教役者と日本人クリスチャンの間には財政や実務といった教会組織運営のためだけに共に努力するのではないただならぬ信頼関係が築かれていったのである。ジョン・モデル (John Modell) 氏はアメリカ人教役者と日本人クリスチャンとの関係をたどってパトロンとクライエント (patron-client) 的なものと表現している。<sup>(2)</sup> これはパターナリズム (温情主義) と似て少々異なるものの、疑似パターナリズムとも言うべき特殊な信頼関係である。

温情主義は上位にいる者が情けをもって下位の者を支配する構造のことをいい、温情主義の歴史的・社会的役割についてはすでにユージーン・ジノヴェーゼ (Eugene Genovese) 氏の *Roll, Jordan, Roll: The World the Slaves Made* (New York: Vintage Books, 1976) によく示唆深さ。ジノヴェーゼはアフロ・アメリカンの文化を研究し、アフロ・アメリカンの文化を作り出した最も重要な要素はアメリカ南部の搾取構造を道徳的に正当化するために生まれてきた温情主義である、と指摘する。温情主義は黒人の自主意識をくだけさせ、人種差別主義によって白人 (主人) への依存心を強める一方で、非人道的な扱いを受けて絶望的な状況にある黒人に最も強力な防御策をも提供してくれる、と言う。これに関連して黒人の文化の核になるのは宗教であり、宗教はその普遍的価値ゆえ人間としての権利、価値を黒人に教え、奴隸制度の搾取構造に対して否といえる武器となるのである。こうして黒人の宗教は黒人の政治意識を高め、その文化的自立心を回復し、アメリカ社会の人種差別主義への抵抗心を強める役割を担った。しかし、黒人が南部で形成した宗教は温情主義の土壌で展開されたものであり——別の言い方をすれば、黒人の宗教はそれ自身が温情主義の産物であるため——温情主義の構造それ自体を破壊し、奴隸構造を変革することは決してなかった。“pre-political” ジノヴェーゼはこれを即ち抵抗する力とはなるが、変革する力とはならないもの、と呼ぶ。日本人の場合をアフロ・アメリカンと同様に扱えないのはもちろんであるが、アメリカ社会の白人と有色人種との人種差

別主義的構造がアメリカ人教役者と日本人との関係に影響を及ぼしており、それゆえ日本人クリスチャンの行動様式、民族意識、政治意識等を規定する要素となっていたと考えられる。

さて従来の研究では日本人キリスト教会の形成・展開におけるアメリカ人教役者をどのように位置付けているのであろうか。シドニー・L・ギューリック (Sidney L. Gulick)、『ハーヴェイ・H・ガイ (Harvey H. Guy) など特殊な働きをしたアメリカ人教役者を中心に若干の考察がなされている。排日問題は一九一〇年代以降最も激化するが、これに抗して日本人を弁護する啓発運動も盛んになった。ギューリックもガイもこれら啓発運動に積極的に関わった顕著な存在である。J・モデル氏の *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles, 1900-1942* (Chicago: University of Illinois Press, 1977, pp. 78f.) はH・ガイによる日米人間の緊張緩和への貢献と啓発運動での重要な役割に注目している。そして日本人クリスチャンが一九二〇年に、アメリカ化はキリスト教によってのみ実現できるという決議をするまでに至ったのはガイの考えが日本人クリスチャン達に浸透していた証左であると述べている。Y・イチオカ (Yuji Ichioaka) 氏の *The Issei: The World of the First Generation Japanese Immigrants, 1885-1924* (New York: The Free Press, 1988, pp. 185-189) は二種類の同化 (外面的同化、内面的同化) を論じている。つまり、日本人クリスチャンはアメリカ人宣教師というアメリカ社会との媒介者を持ち、宮崎小八郎に代表されるようにキリスト教への回心と同化を同一視していた。そしてキリスト教の役割として単に服装や外見だけアメリカ社会に適応していくのではなく (外面的同化)、アメリカ社会の価値観をも吸収する内面的同化であったとのべる。イチオカ氏はまた日本人伝道に関わったアメリカ人宣教師であるO・ギブソン (Otis Gibson)、『S・ギューリック、E・ガイ、H・ジョンソン、E・ストージなどはキリスト教への回心と同化を等しいものと見なし、アジア系移民は同化できないという排日論者からの非難に抗するため、実在するアジア系のキリスト教への回心者を

反証に挙げた、と指摘している。その論拠としてギューリックによる提唱の内容を例示して、彼がキリスト教は日本人の同化に貢献している事、キリスト教化によってのみ日本人の同化が達成されることを強調したことなどを挙げている。これらの指摘はキリスト教と同化、アメリカ化の親和性を主張するものであり、アメリカ人教役者はキリスト教によって日本人の同化、アメリカ化を実現させようとしていたことを例証しようとするものである。<sup>(3)</sup>

これらの指摘には妥当な点も多いかもしれない、しかし若干懐疑的な気持ちで筆者は見ている。というのは、二者が指摘したのはH・ガイ、S・ギューリックなど日本人伝道に直接関与せず、ただ排日問題に対してのみ発言をした人々である。ガイは多少現場に携わっていたが、本職はパシフィック神学院 (Pacific Theological Seminary) の聖書の教授である。ギューリックの活動の焦点は国交行政や立法府であり、日本人にとっては日常とかけ離れた存在であったはずである。伝道活動を直接担当し、日本人に密接な影響力を及ぼしたであろうアメリカ人教役者であるM・ハリス、H・ジョンソン、E・ストージその他が具体的に何を行い、その活動のどの部分が日本人の同化、アメリカ化に貢献したのかほとんど検討されていない。キリスト教会では、アメリカ化された日本人が間違いないと育っていたのだろうか。すでに先稿で示したように排日問題に関してアメリカ人教役者がキリスト教による同化、アメリカ化を提唱し打開策としたことは、当時のアメリカ・プロテスタントの一傾向である。しかしスローガンと現場で実際に行われた事との間に違いはなかったのだろうか。現場で実際に日本人伝道に当たっている各教派から派遣されたアメリカ人教役者たち、彼ら・彼女の行動はどのようなものだったのだろうか。そしてその実践は提唱する目標に導くものであったのか、それとも無かったのか。様々な矛盾を包含しながらも、スローガンを掲げ続けるということが現場の歩みというものではないだろうか。アメリカ人教役者の活動内容を調べてみると日本人の民族教会の育成、存続のために尽力していた面があった事を示すのが本稿の目的である。つまり日本人もさることながら、当のアメリカ

人クリスチャンも日本人の民族性のよりどころとも言うべき民族教会の設立・運営を積極的に行っており、それによって日本人教会の推移が特徴付けられたということが本稿によって示されることとなる。

日本民族教会の維持・存続が何を意味しているかは、すでに多くの社会学者によって指摘されている。アメリカ・キリスト教会は日本民族教会を白人その他の教会と分離して設立した事は歴史の観点からもよく知られており、こうした分離主義はホスト社会のクリスチャンとの直接交流を妨げ、ひいてはアメリカ社会への同化の障害ともなったといわれている。L・ブルーム (Leonard Broom) 氏と J・キヌセ (John L. Kinsuse) 氏の "The Validation of Acculturation: A Condition to Ethnic Assimilation" (*American Anthropologist*, 57, February 1955, pp. 44-47) 1・カイン (Leonard D. Cain) 氏の "Japanese-American Protestants: Acculturation and Assimilation" (*Review of Religious Research*, 3, Winter, 1962, pp. 113-121) 2・ピーターセン (William Petersen) 氏の *Japanese Americans: Oppression and Success* (Washington, D.C.: University Press of America, 1971, pp. 168-189) 3・フランク S. Miyamoto) 氏の *Social Solidarity among the Japanese in Seattle* (Seattle: University of Washington Press, 1984, pp. xvi-xvii, pp. 45-50) 4・キタノ (Harry Kitano, H. L.) 氏の *Japanese Americans: The Evolution of a Subculture 2nd Edition* (Englewood Cliffs, N.J.: Prentice-Hall, Inc., 1976, p. 60) など日本民族教会がいかにアメリカ・キリスト教教派から隔絶されていたか、その結果として日本人の民族的連帯を強めることになったかを指摘している。それゆえアメリカ社会への同化が実質的に遅滞することになったというのである。中牧弘允氏の「日系人とキリスト教——カリフォルニア州サクラメントの事例」(同著『日本宗教と日系宗教の研究』刀水書房、一九八九年、三三二—三六四ページ、本論文はもとと一九八三年に出版された)は現在の日系教会を分析調査し、日系クリスチャンが組織形態においても個人の信仰表現(例 死者祭祠)においても民族性を存続・維持させていることを指摘する。歴史研究においても、拙



稿「初期カリフォルニア日本人とキリスト教」(同志社大学人文科学研究所・「海外移民とキリスト教会」研究班『海外日本人移民とキリスト教』PCM出版、一九九一年予定)、坂口満宏氏の「排日問題と太平洋沿岸日本人キリスト教団体」(『海外日本人移民とキリスト教』)などが指摘するように、日本人は自教派内に日本人民族年会を作ったり、教派協力による基督教伝道団を設立したりして民族的連帯意識を強める活動を行っていた。そしてピーターセンが指摘するように、こうした日本人クリスチャンの教派協力活動の一つの結果として日本人教会は母教派からの分離・独立の傾向を強めるようになった(pp.179f.)。結論を先取りするが、本稿で取り上げるアメリカ人教役者はこうした分離民族教会の存続・維持に努力したのである。

本稿はそのことを明らかにする作業の一環として、まず日本人教会のリーダーシップの有りよう、即ち誰が教会の運営、活動方針を決定し、実行する上で誰が指導力を持っていたのかを検討する。そのことによってアメリカ人教役者は教会のあり方に影響力をもっていたことを示す。そのことをふまえた上で、具体的なケーススタディとしてE・A・ストージの教派協力(合同)論について述べ、次に彼の理念がどのように日本人伝道の中で実現されて行ったかについて言及する。教派協力(合同)をめぐる問題は一九一〇年代以降の日本人教会の展開を見る上でそれだけでも重要な事柄であり、ストージのこの問題への姿勢は当然注目されるべきである。

尚、教派協力(合同)にはいくつかの段階がある。ストージのこの問題に対する考えを理解し易くするために定義をしよう( Samuel McCrea Cavert, *The American Churches in the Ecumenical Movement 1990-1968*, New York: Association Press, 1968 参照)。

無教派(Nondenominational)——教会、教派組織とは無関係にクリスチャンが個人として協力し合う。  
教派協調(Interdenominational)——教派協力的な団体によって各教派が協力し合う。

教派連盟 (Federation)——はつきりとした憲法を持つ教派協力組織のもとに各教派が公的、永続的な協力関係を統  
ける。

組織的合同 (Organic Union)——各教派が教派的独自性を放棄して一つの合同教会をつくる。

### ストージを取り上げる理由

本稿では特にストージを取り上げ、彼が及ぼした日本人教会への影響について彼の日本人伝道觀を検討することに  
よって究明して行きたい。ここでストージを取り上げるにはそれなりに理由がある。まず、ストージがハリスやジョ  
ンソン同様太平洋沿岸日本人の「慈父」、「恩師」として敬愛され続けた事実である。一世クリスチャン M・K 氏の証  
言によると、ストージ「先生は異境にきている青年達にとっては実に温かき父のような心を持って導かれ」たとい  
う。<sup>(4)</sup>それ故在米日本人会編『在米日本人史』(一九四〇年)は、日本人キリスト教会は「ハリス、ストーヂ等宣教者の人格  
的感化も甚だ偉大であったが為に、十年前漸く弧々の声をあげた各派基督教会はいづれも躍進的發展の実を挙げ…」  
(同、三四六ページ)とあるように彼らの影響力をぬきにしては語れないという評価がなされている。<sup>(5)</sup>

ストージは単に日本人伝道の総理という立場だけでなく、日本人と生活を共にし、地域の日本人教会に深く関わっ  
ていた。更に、ストージの名声は現在でも消えていない。役職を勇退したストージはサンマテオに隠居し、一九二五  
年頃その地にあった日本人教会をサンマテオ日本人独立教会と命名したのであったが、この教会は一九五五年にスト  
ージの業績を記念してストージ長老教会 (Sturge Presbyterian Church) と改名し、今日もこの名称を踏襲している。ま  
たストージが引退するまで関わったサンフランシスコのキリスト合同長老教会 (Christ United Presbyterian Church、  
一八八五年に Japanese Presbyterian Church of San Francisco として設立) は一九八五年に創立百周年の記念行事を行い、

その事業の一環として同教会礼拝堂にストージ記念礼拝堂という名称を付け、ストージの業績を永久に残そうとした。加えてその偉業を語る『ストージ全集』四巻（一九三四～三五年）も刊行されてくる（一巻……*The Spirit of Japan* 二巻……『現実とその彼方に』三巻……『ストージ伝』四巻……*Arrows From My Quiver*）。ストージの生涯については全集の三巻（宮崎小八郎著）に伝記の形で紹介されている。しかし、この伝記以外にはストージの業績を描くまとまった著書はない。本稿は可能な限り原資料にたかえってストージの業績をその社会的・歴史的状況の中できとらえ、評価しようとする初めての試みとなるはずである。<sup>(6)</sup>

本論にはいる前に、ストージについて述べておこう。ストージは一八五六年四月二十九日にオハイオ州クリーブランドに生まれる。<sup>(7)</sup>一八七一年にイギリスにいる親戚を訪問したとき、牧師か医者になって苦しむ人々のために尽くそうと決心する。一八八〇年、ペンシルベニア大学でM・D・（とPh・D・？）を終え、長老教会外国伝道局医療宣教師としてタイに派遣される。一八八一年にアニーと結婚した後、コレラやマラリアに苦しむタイの人々のための医療活動に専心する。一八八四年二月三日に私費を投じて病院を建て、そこで五、七十二人の患者を診療した。<sup>(8)</sup>しかしストージ夫妻もコレラに侵されたため、療養のためにタイを離れ、帰国の途についた。<sup>(9)</sup>

彼らの帰国療養の詳細はわからないが、一八八五年七月頃ストージがサンフランシスコに病氣静養をかねて帰ってきていたことははっきりしている。この町にきた目的は、サンフランシスコの中国人への医療伝道にあった。そしてその傍ら日本人伝道にも従事していた。<sup>(10)</sup>当時、日本人ホーム（タイラー福音会）では学校、礼拝とも盛況であり、YMCAでは正式な発足（一八八六年八月二七日）以前から、すでにホームをYMCAと呼んでいた。ストージはサンフランシスコに着いて早々日本人伝道を手伝うことになり、多くの時間をそのために割いていた。彼は日本人伝道に関わる内にその重要性を痛感するようになる。彼は書簡で、時に私は月日がたつに従ってその重要性が増しているこ

の仕事（日本人伝道）を特に担当するためにここにどうして呼ばれなかったのかと思う。この町に来る日本人は着実に増えており、誘惑がいつばいある所にあつてキリスト教による奉仕をせずに放つて置くべきでない、と述べて気持ちの変化を表している。<sup>(11)</sup>

ストージのイギリスにいた叔父は、ストージに中国人伝道をさせたいと強く願つていた。<sup>(12)</sup> その願ひに応えるべくストージは叔父の援助を受けて、少なくとも二年間は中国人伝道に従事する予定をたてて準備していた。長老派外国伝道局にもその旨をストージ自身が申し出、許可を受けていたが、<sup>(13)</sup> この計画は実行されなかった。当時の長老派在米中国人伝道部の総責任者ともいふべきルーミス（A. W. Loomis）が反対したためである。その理由はまず外国伝道局の財政状況が急迫しているので四人目の医療宣教師を招聘（すでに三人の医療宣教師が働いていた）することはできないこと、またストージは中国語が話せないことであつた。そしてルーミスは中国人伝道に赴任する代わりに日本人伝道に赴任するようストージに勧めた。<sup>(14)</sup> そこでストージは朝鮮の釜山に行つて、日本語を勉強する新たな計画を立てた。<sup>(15)</sup> 彼の計画申請と長老派の在朝鮮宣教師アレソ（Allen）からの推薦を受けて、外国伝道局はストージの朝鮮での医療宣教師就任を承認し、決定を本人に通知した。<sup>(16)</sup> その間、彼は、フィラデルフィアに旅し、六月一日、再びサンフランシスコに戻り、日本人の学校の仕事を手伝いながら中国語の勉強を始めた。<sup>(17)</sup>

ストージがサンフランシスコに到着したのはサンフランシスコに日本人長老教会が設立されて直後の事である。先稿で述べたように、サンフランシスコ中会はカーリントンを派遣し、日本人のための日夜の礼拝、水曜祈禱会、学校等を担当させていた。<sup>(18)</sup> しかしA・ケール（Alex J. Kerr）の報告によると、J・カーリントン（John Carrington）はこの学校の経営に関して有能ではなく、事実良い成果をあげられなかったという。<sup>(19)</sup> こうした経緯を見た外国伝道局は、サンフランシスコの日本人のための学校にストージを任命する事を決定し、彼は正式に就任した。<sup>(20)</sup>

ストージは赴任後一八八六年八月二七日に基督教青年会(YMCA)を設立し、それ以後、夫妻共教師として基督教青年会の形成発展に尽力した。それだけでなくサンフランシスコ日本人長老教会長老としてまた説教者として活躍し、一八八七年にはストージはケールと二人で日本人教会を切り盛りし、学校、祈禱会、日曜学校、日曜礼拝、聖書研究会などを一手に引き受けていた。また医学を志す学生のための特別セミナーも行った。ストージ夫人も学校で教えた。<sup>(21)</sup>一八八九年から一八九一年までのドイツ留学の間、当時プリンストン神学院で学んでいた服部綾雄にその任を譲ったが、一八九一年五月一日に太平洋岸長老教会日本人伝道部総理として日本人伝道に復帰。その後一九二二年まで総理として、総理引退後は一アメリカ人クリスチャンとして一九三四年に死去する直前まで日本人教会の形成に尽力し続けた。<sup>(22)</sup>

#### 一、日本人教会のリーダーシップの有りよう

日本人牧師や信徒に並んでアメリカ人教役者も日本人教会の形成・発展を担い、教会の方向性にかんがりの影響力を持っていた。この点を明らかにするために、サンフランシスコの日本人教会を例にとり教会の運営・活動の決定権はどこにあったかを検討する。つまり、リーダーシップの有りようを実例をとって探って行くわけである。その際、まず日本人教会と教派との関係を見る。日本人教会は何らかの形でアメリカの教派に属し、教派の管轄下に教会運営を行っていたので、この関係を明らかにする必要がある。次に日本人教会と教派内の日本人年会との関係である。日本人教会の三大勢力であった長老、組合、メソジストはそれぞれ自教派内に日本人のみによる民族年会を持ち、この年会で伝道方針等を討議、決定していた。第三に、日本人の教派協力団体である基督教伝道団に対してアメリカ人教役者がどのような影響力をもったかを検討する。第四に、日本人各個教会内の有りようを、日本人教役者とアメリカ人

教役者を比較しながら見ていく。最後に、アメリカ人教役者の日本人教会でのリーダーシップについて日本人はどのようにに評価をしていたのかを検討する事で、日本人教会の形成・展開におけるアメリカ人教役者の役割を総括する。

## (一) 教会と教派との関係

日本人教会はアメリカの教派に属し、地方の伝道教区、教派の外国または内国伝道局の傘下にあった。そして教派によってさまざまであるが、教派の方針が、日本人教会の運営、財政、伝道方針に影響を及ぼしていた。

サンフランシスコの日本人教会を例にとると、長老教会はタイラー福音会設立以来ハワード長老教会のR・マッケンジー(Robert Mackenzie)、J・ロバート(James B. Roberts)、及び長老派外国伝道局中国人伝道部のA・ケール、A・ルーミス、元タイ伝道宣教師J・カーリントン等長老教会教役者の指導を受けた。<sup>(23)</sup>日本人長老教会が一八八五年に設立されると、サンフランシスコ中会(Presbytery)はカーリントンを派遣し、日本人のための日曜夜の礼拝、水曜祈禱会、学校教育等を担当させた。<sup>(24)</sup>長老派が日本人伝道に着手したばかりの頃にタイ伝道から帰ってきたストージはサンフランシスコで日本人のための学校教育に従事し、その後一八八六年に長老派外国伝道局から正式に日本人伝道への赴任を命ぜられる。日本人長老教会は一九二二年まで外国伝道局の傘下であり、その後内国伝道局の管轄下に移行された。<sup>(25)</sup>各個日本人長老教会は地元の中会(例 サンフランシスコ中会)に属してはいたが、実質的には外国伝道局日本人伝道部の管轄にあり、日本人伝道部の総理であるストージの指導のもとにあった。ストージは日本人伝道における長老派の代表責任者であり、日本人教会の設立、運営の責任を持たされていた。

メソジスト教会の場合、教会の前身である美以福音会はメソジスト中国人伝道部総理O・ギブソンの管轄下にあった。<sup>(26)</sup>日本人伝道部は一八八五年に中国人伝道部から分立され、日本宣教師M・C・ハリス(後にH・B・ジョンソン)

が一八八六年から正式に日本人伝道部総理に任命されている<sup>(27)</sup>。日本人伝道部はミッシヨナリー・サイティという内国及び外国伝道を総括する伝道局の下にあった。一九〇七年にこの伝道局が外国伝道と内国伝道に分かれたので、日本人伝道部は内国伝道部に属する事になる<sup>(28)</sup>。日本人メソジスト教会は形式的には地元の年会(例 カリフォルニア年会)に属しつつも、実質的には日本人伝道部の指揮下にあったが、メソジスト派は長老派より組織が緻密でヒエラルキックであったから、日本人伝道部の総理であるハリス、ジョンソンは文字どおり日本人諸教会の統括者であり、総大将であり、日本人教会の運営、伝道方針、教会の設立、牧師の任免、その他多くの権限を掌握していた。

組合教会も当初中国人伝道部の管轄下にあった。アメリカ宣教師協会(American Missionary Association)の中国人伝道部(一八八二年に中国人及び日本人伝道部、そして一九〇七年に東洋人伝道部と改称)の秘書(後に総理)をしていたW・ポンド(William Pond)<sup>(29)</sup>、そして後にG・ヒンマン(George Hinman)が日本人伝道を含む在米アジア人伝道を統括していた。その間一九一一年二月二五日のカリフォルニア東洋人伝道部の会合でヒンマンにポンドの仕事の一部援護させる事<sup>(30)</sup>に決し、財務を担当させるようになる。こうして東洋人伝道における総理がおかれ、ポンド、ヒンマンが日本人教会の統括者として教会の設立、その他に影響力を及ぼす。各個日本人組合教会は形式的には地元の年会(例 北カリフォルニア会衆派年会)に属しているが、実際にはこのアジア系教会のための伝道部の下にあった。

聖公会は設立当初東京主教の管轄下にあったが、一九〇二年にカリフォルニア主教区に移籍された。聖公会は日本人伝道のために宣教師を任命し、M・パターソン(Mary L. Paterson)<sup>(31)</sup>、そしてH・ジェフリーズ(H. S. Jefferys)など元日本宣教師に日本人伝道の総理としての責任を持たせた。

改革教会は内国伝道局の指揮下に日本人伝道を開始し、当時ハイデルベルク大学で勉強していた森淳吉を呼び寄せサンフランシスコに派遣した。一九二一年には「日本や中国での同派の伝道と太平洋沿岸地域での伝道をつなぐため

に「太平洋岸部 (Department of the Pacific Coast) が内国伝道局のもとに組織された<sup>(32)</sup>。そうして太平洋岸部の総理として E・エブメーヤー (E. F. Evenmeyer) が着任したが、この総理は特に日本人伝道部のために専任であった訳ではないので、どの程度日本人教会に対して影響力を持っていたのかは不明である。教派から日本人伝道のために派遣されてきたアメリカ人は C・カーシュナー (Carrie M. Kershner) だけであった。彼女は森淳吉の要請を受けて内国伝道局より日本人への英語教師として一九二二年に赴任し、森を助けた<sup>(33)</sup>。他教派と違い、改革派はアメリカ人教役者を日本人伝道の総理として任命することをしなかった。むしろ森淳吉が日本人伝道専任の総責任者として招聘を受けたのであった。

カトリック教会では、一九一〇年にフランシスコ・サカマキとナカムラがブッシュ街とスタイナー街の角にある聖ドミニコ教会で日本人カトリック教徒のグループを結成した<sup>(34)</sup>。一九一三年になってパリ宣教会 (Paris Foreign Mission Society) は日本から B・ブレトン (Bishop A. Breton) を呼び寄せ、太平洋岸の日本人伝道に当たらせ<sup>(35)</sup>た。その結果、同年八月一三日にサンフランシスコに日本人カトリック・ミッション (ブキャナン街二〇一一) が組織された<sup>(36)</sup>。一九一四年イエズス会がパリ宣教会に代わってこの日本人ミッションを管轄する事となり、名称を聖フランシスコ・ザヴィエル・ミッションと改ためて、同年一月二十九日に日本人教会をつくる<sup>(37)</sup>。J・エグロフスタイン (Julius von Egloffstein, S.J.) 神父が牧会を担当し、マッティなる人物が彼を助けた。続いて P・モア (Pius Moore, S.J.) 神父が後任となり、一九一八年にバイン街とオクタビア街の角に教会堂と住宅を購入した。その後一九二五年にイエズス会に代わってディヴァイン・ワード (Society of Divine Word) が管轄する事になる。日本人カトリック教会はこうして終始外国伝道局の管轄下におかれる事となり、そこから派遣されたアメリカ人教役者の指導を仰ぐ事になる。

教派との関係において、日本人各教会はアメリカの教派の地方教区 (年会) に属していながら、実際は教派の外国



または内国伝道局にある日本人伝道部（東洋人伝道部）の管轄下にあった。例外的に聖公会は一九〇二年からカリフォルニアの管区（Diocese）にはいつている。またカトリック教会はずっと外国伝道局に属していた。教派と日本人教会の窓口になっているのは教派から派遣されたアメリカ人教役者であり、一般的に総理とか監理と呼ばれ、在米日本人伝道（またはアジア人伝道）を統括していた。その指導力は教派によって差はあるが、日本人教会の設立、牧師の任免（メソジスト）、伝道方針、財政等に権限を持っていた。改革教会のみは例外的に日本人伝道（アジア人伝道）のためにアメリカ人総理を専任させることをしなかった。というのは改革派は在米日本人伝道着手のために日本人教役者森淳吉を任命、派遣したからである。教派より日本人伝道に派遣されたストージ（長老派）、ハリス及びジョンソン（メソジスト派）、ポンド及びヒンマン（会衆または組合派）、パターソン及びジェフエリイズ（聖公会）、エプメイヤー（改革派）、ブレトン及びエグロフスタイン（カトリック）などは日本人教会の形成・展開に関わりを持つ人々であった。

## （二）日本人年会とアメリカ人教役者

日本人教会の伝道活動には四通りの活動形態がある。各個教会として、教派として、教派内の日本人年会として、そして教派協力団体としてそれぞれに立場があった。教派として動く場合、既述したように日本人伝道に関わるアメリカ人教役者の存在はきわめて大きい。ここでは教派内の日本人年会としての活動に焦点を当てて検討する。教派協力団体としての活動は次節で述べ、そして各個教会としての活動については四節で述べる。

日本人教会はアメリカ・プロテスタント教派の影響下に形成された。キリスト教の本来的理念には、こうした民族教会の存在そのものが矛盾しているかもしれない。しかし、現実には教派の側でも、日本人の側でも民族・人種についてのこだわりを信仰の下にあってもなかなか止揚できなかった。そしてこのことは日本人だけに限った事ではない。

アメリカの移民グループが教派内に自らの民族教会を形成してきた事はよく知られている。日本人も日本人の民族的年会（伝道区）を自教派内につくっていた。日本人年会は教派内で日本人同士が一致団結して同胞への伝道活動、同胞の抱える諸問題に取り組むためにきわめて有効であつた。こうした日本人年会は機能に多少の変更を加えながらも現存している（日本人長老教会年会、日本人組合教会年会、日本人メソジスト幹部会議、など）。以下長老、メソジスト、組合教会の日本人年会について見ていきたいが、これらの設立経緯についてはすでに別稿で論じたので省き、日本人教会と年会との関係、アメリカ人教役者と年会との関係、年会の機能等について述べていきたい。<sup>(38)</sup>尚、聖公会、改革教会はこうした日本人だけによる年会を組織しなかつた。これらの教派は前記三教派ほど教会数がなく、日本人だけで集ま<sup>(39)</sup>って年会を組織するまでには至らなかつた。

日本人長老教会は前述したように各地域の中会に属しつつも、実質的にはストージの支配下にあつた。日本人長老教会は地域の中会単位を越えて日本人による民族的組織である日本人長老教会年会（Japanese Presbyterian Conference）をつくり、第一回年会を一九〇五年に開いた。この年会は各地に散らばっている日本人長老教会員が同胞の教化という共通の目標の下に連帯し、同胞への伝道活動をより効果的にするための具体的な伝道戦略を考え、実行する事を目指していた。

日本人伝道総理としてこの年会に関わつたストージとこの年会とのつながりは強く、彼は自らの財産、給料を日本人伝道のために投じた。当時日本人年會議長であつた秦庄吉と書記佐藤が一九二一年に長老派外国伝道局に宛てた書簡はそのことをはっきりと示している。即ち、ストージはこの二年間給料をもらわず、その金を新伝道地を開拓したり、弱小の伝道地を援助するために全部捧げていた事。彼は給料を日本人伝道にあてるだけでなく、自分自身の財布から毎月六〇〇七〇ドル支出していた事。そしてこの事実をこれまで日本人達は全く知らずにいたこと。彼らはスト

ージが出すお金はすべて伝道局から日本人伝道のために出ているものと思ひこんでいたこと、である<sup>(40)</sup>。こうして三十年以上にわたり日本人伝道に尽力していたストージであったが、老境に入り引退を考へるようになった。ストージは一九二〇年八月一日に彼の伝道四十周年を期して伝道から手を引く意志がある事を外国伝道局に手紙で伝えた<sup>(41)</sup>。それに対して一九二〇年度の日本人長老教会年会は外国伝道局に対してストージのような“consecrated godly man”のリーダーを辞めさせるようなことがあつてはならないことを訴へ、ストージの辞職願ひを受理せず今の地位に留まるよう勧告するようにと内容の決議文を提出した<sup>(42)</sup>。年会のこの対応は、ストージが年会からいかに崇められており、彼のリーダーシップを必要としていたかを示している。

メソジスト教会も各地域の年会に属していたが、同時に日本人連回会（一八九三年日本人ミッション伝道区として組織される<sup>(43)</sup>）に属していた。連回会は一九〇〇年より太平洋岸日本人ミッション（Pacific Japanese Mission）となる<sup>(43)</sup>。この連回会及びミッションは教派が設立したものであり、長老教会年会より以上に組織化されたものであり、多くの権限を持っていた。日本人メソジスト教会はこの連回会及びミッションを統括する総理の指導下にあり、日本人伝道の企画や牧師の任命もここで行った。

組合教会は長老、メソジスト同様各地域の年会に属しつつもアメリカ宣教協会のアジア関係伝道部の管轄下にあり、アメリカ人総理が指導していた。そして組合教会も他の二派同様、日本人組合教会年会を組織し、第一回年会を一九〇九年一月一六日に開いた。この年会の規則及び信仰告白は日本組合教会と同じものを使用した<sup>(44)</sup>。

これら三つの日本人年会の主要な活動内容を年会報告を手がかりに分類すると表1のようになる。

こうしてみると日本人年会は同胞へ福音を伝えるという大前提の下に団結し、各地域での伝道活動をより効果的に進めるために協力しあうという点に組織自体の存在意味があつた。そしてそのためには教派協力の推進をも惜しまな

表1 長老、メソジスト、組合教会年会主要活動一覧

伝道活動の強化	
長老	*機関誌として1906年に『独立』を発行する。
メソ	*機関誌『救の音』、『喜の音』、『福音』、『護教』の出版を指揮する（1894, 1917年）。 *エボース同盟会設立を決める（1899年）。 *教会の成長のために戦闘的な伝道キャンペーンを行う（1910—11年）。 *メソジスト派の百年祭キャンペーンを推進する（1918年）。 *1919年のメソジスト総会に覚え書きを送り、外国語による年会の必要性、日本人連回会の存続を訴える（同総会が外国語による年会や伝道区を英語のそれに統合して廃止する事を奨励したから）。
組合	*特別伝道キャンペーンを企画する（1913年）。
地方伝道への支援	
長老	*新しい伝道所の設立を援護する（1908年モントレイ, 1917年ローダイ）。 *弱小日本人教会（ロンボック, その他）を財政的に援助する（1917年）。
メソ	*新教会の設立を支援する（例1894年ヴァカビル教会）。 *伝道救済会から財政難の教会に援助する（1906年）。
組合	*新教会設立を援助する（例 1913年セバストポールとサンタローサなど）。
教会合同, 教派協力	
長老	*他教派に属する日本人教会との教会合同のために努力する（1911年合同達成のための実行委員会を設立, 1914年長老, 組合, ディサイプル, ユニオンとの合同決定）。 *教派協調組織基督教伝道団をその一環として支援する（1914年）。
メソ	*教派協調組織基督教伝道団を支援する（教派合同には消極的であった）（1913年）。
組合	*日本人教会の合同を推進する（1914—1917年）。 *教派協調組織基督教伝道団を支援する（1914年）。 *他教派との協同伝道を提案する（1915, 1916年）。
記念事業	
長老	*ストージの伝道に対する謝恩記念事業を企画する（1911, 1916, 1920年）。
メソ	*ハリス, ジョンソン, ヴェールのための記念事業を企画する（1902, 1917, 1919, 1923年）。
組合	*ボンドへの感謝を公式に表明する（1909年）。

日本伝道	
長老	* 日本伝道に協力するために特別委員会を設置し、長老教会外国伝道局に寄付を送る (1913年)。
組合	* 年会の日本組合教会及びアメリカン・ボードとの関係の緊密化について協議する (1911, 1913年)。
時事問題	
長老	* 排日土地法 (1913年) や排日移民法 (1924年) に反対声明を出す。 * 日米関係を良好にするために日本の対朝鮮政策を弁護するための活動をする (1920年)。
メソ	* ポートランドの水難者のために寄付を送る (1894年)。 * 「文明と個人の自由」を守るために日露戦争での日本の勝利を支援する (1904年)。 * 第一次大戦の際には「正義に対抗する力の政府を破壊」しこの世にキリストの王国と平和を実現するためにアメリカの参戦勝利を支持する (1918年)。 * 関東大震災後の復興を推進するための特別委員会を設ける (1924年)。
組合	* 1913年と1924年の排日法案に対する批判を打ち出す。 * 1919年には「キリスト教主義による民主主義, 自由, 平等の精神」, 「アメリカ化」, 「キリスト教的道徳水準の優等性」, 及び在米同胞の生活水準の向上を提唱する。

参考資料：\* 長老教会年会については以下のもの参照。

年会準備委員編『在米日本人長老教会歴史』(伝道廿五年祝会委員出版, 1911年), 『福音新報』(1908年7月16日, 1910年6月16日, 1913年7月3日, 1920年6月17日), 『新世界』(1915年5月15日, 1924年7月28日), 『新天地』(1913年6月, 1914年6月, 1915年6月, 1916年6月, 1917年6月), 「長老教会年会記事」(1912, 1914年, Westview Presbyterian Church, Watsonville 所蔵)。

\* メソジスト教会連回会については以下のもの参照。

Pacific Japanese Methodist Episcopal Church, *Official Journal*, 1901—1924 (GTU), 『太平洋沿岸日本人連回会記録』(1894, 1899年, Pine United Methodist Church, S.F. 所蔵)。

\* 組合教会年会については以下のもの参照。

*The Pacific* (February 10, 1910), “Among the Orientals” (*The Pacific*, May 13, 1914), “Japanese Annual Conference Resolutions” (*The Pacific*, June 1919), 『新世界』(1911年1月24—25日, 1924年7月26日), 『新天地』(1913年10月, 10ページ, 1915年6月, 10ページ, 1916年6月, 9ページ, 1917年6月, 8ページ), 『福音新報』(1913年7月3日), 『基督教世界』(1914年6月18日, 1922年7月13日)。

かった。加えて、日本人年会は日本人クリスチャンの代弁機関として時事問題に対してあたかも教派を代表するかのよう<sup>に</sup>に自らの姿勢を表明している。本来的には日本人年会は教派の一構成要素にしかすぎないのであるが、日本人にとって年会はそれ以上のものであり、彼らにとって自らの年会は教派そのものであったというと言い過ぎであろうか。一つ興味深い事は三年会とも自分達の「大将」とも言うべきアメリカ人総理に対して感謝の意を公に表明している事である。長老、メソジストの場合は、総理のための記念事業まで行っている。

日本人教会は自教派の地方教区では単なる一少数民族教会の構成員であった。しかし日本人年会の担い手になるとき、たとえ教派内では少数であっても日本人として団結して自らの問題意識等を日本人同士で分かち合い、連帯して問題解決に向けて突き進む事ができた。組織的に緻密でヒエラルキーがはっきりしているメソジスト教会連回会及びミッションの場合一層その傾向が強い。それぞれ違いはあっても日本人年会は日本人教会にとってなくてはならない存在であり、この年会を通じて日本人クリスチャンは教派内の一少数民族グループとしての共同意識、連帯意識を養い、実生活の支えとしていた。そしてストージ、ハリス、ジョンソン、ポンドはこれらの年会と教派をつなぐ存在であり、日本人にとって自教派に対して、アメリカ社会に対して発言していく際の顔役であった。それゆえ総理を通じて教派と折衝したり、あるいはアメリカ社会に対して総理の名前を持って日本人の考えを代弁してもらったりしていたのである。日本人クリスチャンとアメリカ人教役者との間の信頼関係はこうして強まり、同時に依存関係も強まっていたのである。

### (三) 基督教伝道団とアメリカ人教役者

日本人クリスチャンは一九一〇年代にはいって同胞社会をめぐる多くの問題に対応するために教派協力の日本人伝

道団体を組織する。中でも一九一三年に南北加州の日本人教派協力団体が合同して設立された基督教伝道団は最も大規模な団体の一つであった。尚、伝道団の具体的な活動については前掲坂口満宏氏の論文を参照されたい。

伝道団にストージを含むアメリカ人教役者はどのように関わったかという点と、「顧問」が設けられ、「日本人伝道に關係深き米國諸教派の総理及其他の名士を請ふて顧問とす」ることになった。北カリフォルニア地域ではストージ(長老)、ジョンソン(メソジスト)、ガイ(キリスト)、ヒンマン(会衆)、アクトン(南メソジスト)が常置委員によって推挙された<sup>(45)</sup>。ストージ、ジョンソン、ヒンマンは一九一三年一月二四―二八日に開催された伝道団年会で、「伝道団の事業に対する同情の意」を表し「之が後援を吝まざるべき」こと、「伝道団より必要と認むる所を要求せん」ことを求めた<sup>(46)</sup>。顧問という点と直接運営、活動に関わらない相談役のようであるが、実際は後述するように、顧問は各教派とのパイプ役であった他、アメリカ人への啓発運動を主道的に担い伝道団の活動を積極的にバックアップした。それゆえ単なる顧問というよりも実質的には伝道団のホスト社会向け別動隊であった。また後述するが、伝道団の活動経費をすべて日本人でまかなうという訳には行かず、顧問を通じて各教派から補助金を出してもらう事になる。伝道団は一九一五年一月の年会で中央基督教伝道団、北加基督教伝道団、南加基督教伝道団という三団体に分かれることになるが、三団体とも顧問をおき、ストージ、ジョンソン、ヒンマンは引き続き伝道団活動に参与した<sup>(47)</sup>。

アメリカ人教役者が伝道団の顧問として運営、活動に関わっていたことはすでに述べた。財政援助の面では、太平洋沿岸東洋人伝道に従事するアメリカ人伝道者の年会として伝道団への協力、援助を決め、一九一三年二月中旬に会合を持ち、さっそく八派の伝道局に年額二〇〇ドルの補助金を支出するよう要請している<sup>(48)</sup>。それに対して会衆派伝道局は三月に、続いて長老派伝道局、五月にはメソジスト派伝道局も年額二〇〇ドルの伝道団への援助を決定し、年末になって南メソジストも補助金をだすことになった<sup>(49)</sup>。一九一三年一月一八日の同アメリカ人伝道者の年会では伝道

表2 基督教伝道団会計収入報告 1913～1917年度

期 間	収入総計	内 訳
1913年度	\$ 4,075.56	繰越金 24.28 団員 1,685.75 一時寄付 1,186.76 特別寄付 580. 伝道会社 491.65 克己献金 107.12
1914年度	4,537.88	繰越金 54.39 特別寄付金 1,074. 団員及寄付者 2,640.39 補助金 683.40
1915年度	3,911.53	団員及寄付者 2,014.63 特別寄付金 1,122. 諸伝道会社 774.90
1916年度	4,461.18	団員及賛助員 3,037.75 特別寄付金 531. 雑収入 117.43 諸伝道局 775.

参考資料：

「伝道団年報」(『新天地』1914年1月)

「伝道団年報」(『新天地』1915年1月)

「伝道団会計報告」(『新天地』1916年1月)

「中央伝道団会計報告」(『新天地』1917年1月)

中に伝道団への補助金として二〇〇ドルが計上されている<sup>(51)</sup>。その後、一九一五年度予算に二〇〇ドル、一九一六年度に三〇〇ドルがそれぞれ計上されているが、それ以降は予算に計上されていない<sup>(52)</sup>。こうした各派伝道局からの補助金は伝道団予算にどの程度の比率を占めたのだろうか。伝道団の会計報告の全部を入手できないでいるが、一九一三年から一六年度のものと表2にあるように、一九一三年度は全体の収入の一二%、一九一四年度は一五%、一九一五年度は二〇%、一九一六年度は一七%というように財源として小さいものではなかった。

伝道活動面でも排日問題を中心に、同東洋人伝道に従事するアメリカ人伝道者の年会は積極的に動いている。一九一三年に、排日は福音伝道の障害となっている事、日本人は脅威となるのではなくむしろ勤勉で真理を求めてキリス

団幹事を招待して活動報告を聞くとともに、伝道団に対する各派伝道局からの補助金を少なくとも年額三〇〇ドルにするよう求めていくことを満場一致で決した。当日ジョンソン、ストージ、ポンド、ヒンマン等も出席していた<sup>(50)</sup>。補助金の推移を、一例としてメソジスト派について見てみると、一九一三年八月二〇～二五日に開催された太平洋岸日本人ミッシン年会では一九一四年度の予算の



ト教国のために貢献している故、「神の父なることと人類のすべて兄弟なること」を行いでもって示し、日本人を含む他国人の境遇を改善するよう呼びかける「親書」を五月二一日付で各派の教会牧師に配布した。<sup>(53)</sup> また同年会が排日土地法に対して人種差別的土地区に抗議する声明を出した事はよく知られている。<sup>(54)</sup> こうしたアメリカ人教役者の排日土地法にたいする反対運動がどれだけ伝道団の啓発運動と直接つながっていたかを示す資料はないが、以下の事実から両者が無関係でなかった事がわかる。一九一三年五月八日に伝道団は常置委員会を開き、時局問題に対する対応を決めた。<sup>(55)</sup> それは四つの項目からなっているが、その一つはアメリカ人教役者と伝道団の啓発運動への関わりを考える上で重要なのであえて紹介する(「伝道団報」、『新天地』一九一三年六月六ページ)。<sup>(56)</sup>

一、時局問題に対し広く米人の同情に訴へ与論を喚起すると同時に恰く日本人の実状を知らしむるの必要を認め本団は左の方法により米人基督教徒に向つて極力運動することを決議す

(A) 米国人間に広く宣言書を配布し問題の真相を知らしむること

(B) 宗教機関雑誌に訴へ与論を喚起すること

(C) 宗教団体に委員を送りて其運動を喚起すること

委員(北加) ジョenson博士、ガイ博士、ストウジ博士、ヒンマン博士、アクトン博士、宮崎小八郎、森淳吉、広田善朗、安孫子久太郎、小室篤次、小平国雄

(湾東) 平信徒同盟代表者一名

(南加) ソバル博士、デエ博士、バートレット博士、河合慎三、川島末之進、田中義一、古屋孫次郎、大迫元繁

この時局問題への伝道団の決議によって、アメリカ人教役者が日米人啓発運動の一翼を担っていたことがわかる。また、同五月八日に伝道団は顧問であるアメリカ人教役者達と常置員との懇親談話会を開き、「対時局問題」と「教会合同」等に関する意見交換を行っている。<sup>(57)</sup> 一九一三年度の「伝道団年報」によると、H・H・ガイが伝道団の名譽巡回伝道者としてアメリカ人に対する啓発運動を各地で行った他、日本人伝道に関わる諸教会総理ジョンソン、ストー

ジ、ヒンマン、アクトンは檄文を沿岸のキリスト教会や伝道者に送って注意を喚起し、問題解決のために努力を促したとある。<sup>(58)</sup>

アメリカ人教役者は組織的には顧問という形の位置付けではあったが、活動面では教派伝道局からの伝道団への資金援助確保、排日問題に対する啓発運動の機動力として日本人に大きく貢献した。そしてアメリカ人教役者の日本人への有形無形の援助の手は日本人クリスチャンにとっては得難い救いの手であり、アメリカ人教役者への信頼、依存度を一層強めたに違いない。

#### (四) 教会内でのリーダーシップ（アメリカ人教役者と日本人教役者）

これまで日本人教会と教派との関係を見てきたが、本節では日本人各個教会内でのリーダーシップの有りようを見ていく。個別教会でのアメリカ人教役者の関わり方を明確にするために、その比較の対象として日本人教役者の役割をも見ていく事にする。

ここではサンフランシスコにある二つの日本人教会（長老、メソジスト）を例にとってみていく。これら二つの教会は日本人教会としては最も古く、信徒も多く、しかも日本人教会が各地にできていく際や、日本社会でのクリスチャンによる諸活動の拠点となった教会である。二教会は日本人教会史の出発点とも言え、現在も二派の拠点教会として重要な意味を持っている。

長老教会は組織的には長老政治をとり、二つの決議機関を持っていた。役員会または小会（Session）と呼ぶ、牧師を議長とし、教会員内から選ばれた長老とによって構成されるもの、もう一つは、会員全員に議決権のある総会であった。役員会は教会生活の主導力であり、信仰表現、財政、会員管理、牧師の任免、その他にわたって影響力を持つ

た。一八九八年までアメリカ人教役者が役員会議長として会を取り仕切り、ただし一八九六年からは日本人牧師もともに議長職をつとめた。<sup>(59)</sup> ストージは按手札を受けていなかったで議長にもならず、又牧師としてリーダーシップを発揮したわけではなかった。しかしストージは一八九一年から宣教師として役員会に参加し、九七年に長老に選出されて以降ずっと一長老という立場で終身役員であり続けた。

一八八六年にストージは基督教青年会を組織し、指導を続けた。一八九二年八月一五日、教会臨時役員会はサンフランシスコ神学校のサンアンセルモ移転にともなう空き地、ヘイト街一二一への基督教青年会と教会の転居を決めた。その際この土地の獲得にはストージの尽力があった。<sup>(60)</sup> 一九一一年、教会は青年会と合同してインスティテューショナル・チャーチを建てる事を決め、同年五月付で「趣意書」を作成するのであるが、この計画は後述するように、ストージの長年の願いを実現したものであった。また一九一四年にサンフランシスコの長老教会と組合教会とが合同したのもストージの影響力が大きかった。この問題については別稿で述べる。

メソジスト教会は組織面では二つの決定機関があった。一つは牧師、各委員会の代表、各組の代表で構成される役員会。ちなみに一八九四年の役員会内には慈善、会員、図書、宿泊、婦人室などがあった。<sup>(61)</sup> 役員会は毎月定期的に開かれ、教会運営、活動の日常的な事柄を討議し、決定した。もうひとつは四季会であり、ハリス(議長)と役員会の構成員によって成り立っている。たとえば一八九四年の四季会には役員会のように委員会があり、建築、図書、音楽、慈善、日曜学校、記録、教育、連回会の幹事、教会幹事、会計などがあり、教会運営全体に関わる重要な問題について討議、決定し、牧師選定委員や予算等もここで審議した。<sup>(62)</sup> 教会の決定機関として重要なのは四季会であり、この議長をつとめるハリス、ジョンソンはその統括者であった訳である。

牧師の任免に関しては連回会及びミッシェンの総理が決定権を持っていたので、ハリス、ジョンソンに権限がすべ

表3 サンフランシスコ日本人教会歴代日本人牧師一覧

桑港日本人長老教会（1914年以降は桑港日本人基督教会）

就任期間	名 前	出 身 校
1889—91	服部 綾雄	明治学院, プリンストン神学院
1896	奥野 武之助	サンフランシスコ神学院
1897—98	稲本 謙一	明治学院, サンフランシスコ神学院
1900	川部 源之助	
1901—04	坂本 多三郎	サンフランシスコ神学院
1905—06	辺 敢	（プリンストン神学院）
1906—07	渡谷 善次郎	東北学院, サンフランシスコ神学院
1907—10	寺沢 久吉	大阪三一神学校
1911—16	宮崎 小八郎	早稲田, サンフランシスコ神学院
	小平 国雄	東北学院, パシフィック神学院
1917	小 平 国雄	同
1918	小 平 国雄	同
	佐藤 新五郎	サンフランシスコ神学院
1919	佐藤 新五郎	同
	秦 山幸次郎	明治学院, ワバシュ大学, プリンストン神学院
	貴山 幸次郎	東京築地一致神学校
1920	貴山 幸次郎	同
	鈴木 吉助	東北学院, セントラル, プリンストン神学院
1921	鈴木 吉助	同
	佐藤 新五郎	前掲
	江木 村寛	東京神学社, プリンストン神学院
1922	江木 村寛	サンフランシスコ神学院
	江村 上田	前掲
	桑 秀延	東京神学社, (オーバン神学院)
	内 村 道吉	明治学院, オービリン及びハーバード大学
1923—24	内 村 道吉	前掲

桑港日本人美以教会

1885—86	美山 貫一	美会神学校, 青山学院
1886—93	河辺 貞吉	
1893—94	石坂 亀操	東奥義塾, (ギャレット神学院, シカゴ大学)
1894—96	土井 彦徳	
1896	吉崎 彦徳	
1896—97	池田 雅之助	(シンプソン大学, アイオワ州)
1897—98	三谷 末之進	ガレット神学院
1898—99	川島 久五郎	
1899—03	小畑 善朗	ガレット及びシカゴ神学院
1903—11	小田 善篤	青山学院
1911—14	小田 堅篤	東北学院, パシフィック神学院
1914—17	小田 堅篤	前掲
1917—19	宮 沢 六郎	青山学院, ボストン神学院
1919—20	白 喜之助	明治学院
	鈴 宗 音重	青山学院
1920—23	津 田 弥三郎	
1923—31	津 田 弥三郎	ガレット神学院, イーストウェスタン

桑港日本人組合教会

1899	照井	丙吉	同志社
1899	佐々倉	代七郎	同志社
1904—05	佐々倉	代七郎	同
1904	大久保	真次郎	同志社
1905	西村	茂	同志社
1905—06	渡辺	栄太郎	同志社
1907	及川	勇五郎	東京伝道学校, 東京専門学校
1908	斉木	仙粹	東京外大
1908	末広	浅次郎	パンフィック神学院
1911—14	福島	熊蔵	東京伝道学校, パンフィック神学院

桑港日本人聖公会

1895—96	田井	正一	東京三一神学校
1896—99	上村	態次郎	
1899—03	吉村	大重光	東京正三一神学校, パンフィック聖公会神学院
1903—13	斉藤	長次郎	同聖公会神学院
1905—09	青木	真二郎	同
1909—13	前川	英久	慶応義塾, 同聖公会神学院
1913—17	村上	英久	同聖公会神学院
1917—18	村藤	齡吉	同
1920—25	田島	準吉	同

参考資料:

\* 長老教会

『在米日本人長老教会歴史』, 『役員会記録』 (1914—25年, Christ United Presbyterian Church, S.F.) Presbyterian Synod of California, *Minutes* (1894—1924, PCOH).

\* メソジスト教会

『回顧四十年桑港美以教会歴史』 (1926, Pine United Methodist Church), 広田善朗「歴代の牧師, 役員, 会員」 (1915, ただし後に津田弥三郎の時代までの分が加筆されている, 同)。

\* 組合教会

California Chinese Mission (AMA), *Annual Report* (194—05, 1905, 1907, Amistad Institute, Tulane University), California Chinese and Japanese Mission (AMA), *Quarterly Letter* (August-November, 1904, November 1904-February 1905, February 1905, February-May 1909, July-October, 1911, 同), California Oriental Mission (AMA), *Quarterly Letter* (March-June 1908, July-October, 同), *The Pacific* (July 15, 1909, p. 10; September 1, 1910, p. 10; July 26, 1911, p. 9), 『新天地』 (1912年11月), 『新世界』 (1908年9月14日), 桑港美以教会『教会記録』 (1903—11, Pine United Methodist Church)。

\* 聖公会

*Pacific Churchman* (September 1, 1899, p. 6, GTU), “Japanese Mission” (*Ibid.*, November 1, 1907), “Japanese Mission” (*Ibid.*, May 15, 1908), *Ibid.*, (December 1908, p. 4), 『新天地』 (1913年11月, p. 11), 『新世界』 (1913年6月14日, p. 3), Andrew Otani N., *A History of Japanese-American Episcopal Churches* (1980)。

\* その他

日本基督教聯盟『基督教年鑑』 (1927, 1935年), 中央神学校史編集委員会『中央神学校の回想』 (1971年), 『日本キリスト教歴史大辞典』 (1988年)。

て集中していた。一八九〇年、ハリスはサンフランシスコ日本人メソジスト・ミッションの独立と日本人教会の会堂建築を提案し、教会設立当初から一体となつて活動していた福音会を分離した。ハリスの尽力により、一八九四年教会は新会堂に移転した。この会堂は一九〇六年の大地震で崩壊するのであるが、ジョンソンの尽力で一九〇九年再び新会堂の捧堂式を挙行する。

では日本人教役者の役割はどうであつたのか。リーダーシップの面でアメリカ人教役者と日本人教役者を比較すると、日本人教役者の影は薄い。その理由は所属する教派の構造的特徴によるものもあるし、海外の日本人社会にある教会という特殊な条件によるものもあつた。以下いくつかの代表的な理由を挙げてみる。

まず、常識的に考えられる理由は、日本人教役者が十分な神学教育、教派に関する知識を持っていないために指導力を発揮できなかったのではないかとすることである。しかしこれは日本人教会の場合殆ど当てはまらない。というのは大半の日本人教役者は日本かアメリカ（または双方）にある神学校で教育を受けていたからである。長老教会の場合、表3が示すように、判明している限りに於いて赴任した日本人牧師のほとんどは長老派系の学校で神学教育を受けている。メソジスト教会は出身校が不明な教役者が多いのでまだ結論を出せないでいるが、組合教会、聖公会については長老教会と事情が同じであつた。改革教会では設立以来一五年間にわたつて森淳吉が牧会に従事した。東北学院の出身であつた森は在日改革派宣教師J・モア（J.P. Moore）の誘いによつてアメリカの神学校で勉強するために渡米した。彼はハイデルベルク大学及び神学校、オハイオ州デイトンのセントラル神学校で学んだ後、一年間ハイデルベルク大学で哲学のスペシャル・スタディを修めており、高等な神学教育を受けていたといえる。<sup>(63)</sup>

次に考えられる事は、日本人教役者がじっくり指導力を浸透させられるだけの期間にわたつて一教会の牧会を担当

していたのかどうかである。これについては改革教会と一部の教役者を除いては否定的な事実がでてくる。たとえば長老教会の場合、歴代教役者一覧を見ればわかるようにほとんどの牧師は短期間でめまぐるしく代わっており、教会運営、信徒訓練などでリーダーシップを有効に発揮できたかは疑問である。また、神学生（例 サンフランシスコ神学院、パシフィック神学院、パシフィック聖公会神学院）が日本人牧師を兼ねている場合も多く、牧会だけに専念できなかった。このことは改革教会の森淳吉と教派から人件費の援助があるメソジスト教会に赴任した少数の牧師を除いて、他の教会にもあてはまる事である。

更に、日本人教役者の雑務の量や信者と牧師の関係である。概して在米日本人教会の牧師は教会の用事以外に、日本人社会の一つの顔としてさまざまな団体に関わっていた。それらは教会、教派協力によるさまざまな活動（例 日本人長老教会年会、基督教伝道団）、キリスト教以外の諸団体との提携による事業（例 慈恵会など）などであった。しかも信徒やその他同胞のために奉仕活動、英語通訳、職業斡旋、カウンセリング、もめごと、よろず引き受け等あらゆる雑務をこなさなければならなかった。こうした日本人牧師の働きの割に同胞社会や教会員たちの評価はそれほど高くなく、しばしば牧師を自分達の思うように働く便利屋のようにみなしていたようである。メソジスト教会の『喜の音』（一九〇一年八月）に掲載された「牧師の任 会員の心掛け」にはそのことを例証する一牧師の証言がある。

師（牧師—吉田）の任は素より日曜の説教と水曜の祈禱会とに止まらず毎日少なくとも六時間は読書静思祈禱に過し余れる時間は訪問等に力を尽すべく人類社会の最下等の些事をも厭ふべからずと雖ども其職たるや人類社会最上等の高僧なれば信者会員は師に対して奴僕の取扱い為す可からず況して師と会員と特別々懇の間柄ならざるに君々コウシテ呉レ給へなど、馴れ々しき言葉を用ひ或は酒煙草の買方を依頼するに於てをや……師か益々謙遜を守り会員は益々尊敬を主とすべきに問々心得違の者あるを耳にするは誠に福音伝播の爲め甚だ悲むべき限りならずや……

とあるように牧師は信者から小間使いのように扱われることがあった。同誌（一九〇二年四月）の「幸なる信者」では、

信者は牧師の欠点をあら捜しして自らの徳を養わないようではいけない、むしろ牧師をいたわり兄弟姉妹を愛するようであるべきである、と述べている。この記事は信徒は牧師を信頼し、尊敬していなかった事を暗示するものとして興味深い。これらからみると教役者は日夜雑務に追われ、しかも信徒からはそれほど評価されなかった事がわかる。

また同胞社会も、クリスチャン教役者が没社会的、非常識で、キリストの教えを実践しておらず、同胞社会にたいして靈的指導者として十分な貢献をしていないと批判した。サンフランシスコ湾岸地域で大きな影響力をもっていた日系新聞である『新世界』よりいくつか記事を拾ってみよう(尚同地域には『新世界』と並んで『日米』も発行されていたが一九二二年以前は被閲できない)。たとえば永田稠はサンフランシスコの力行会(後に改革教会に吸収される)に関わる者として当時の教役者の置かれた状況を内部告発的に語る。彼は「教会合同独立の準備(一)(八)」(『新世界』一九二二年二月二七日〜三月六日)で、教会不振の原因に牧師が大いに関わっている事を指摘している。すなわち教会不振の要因は「教会は自ら求めて社会と隔離」したために社会に対する運動法を知らなかった事、「牧師の無社会的」、「空論的」説教及び「形式的祈禱」によって実践がおろそかになっていたこと、牧師の任期が短すぎて落ちつかない事、牧師と会員、会員相互間に「感情の衝突」があったり党派争いを行っている事、牧師の「没常識の言行」と社会との交渉、牧師の心中に「嫉妬の情」や「小巧妙心」があることなどを指摘する。教役者のリーダーシップはこうして教会内だけでなく同胞社会内でも注目されており、教役者の指導力のなさが批判的となることがしばしばあった。では真にリーダーシップを発揮するような教役者がいたとしたら、信者や同胞社会は正当な評価をしたのだろうか。永田稠の「真の教役者に同情す」(『新世界』一九二二年二月一日、二ページ)は教役者が十分な指導力を発揮できない内外の状況について述べる。彼によると、

疲れたる頭腦を肥さむと少しの間書齋に入れば『僕等の牧師は書齋に計り這入つて居る』と云はれる遠大なる作戦計画を立てる



と、『効果が見えぬ』と云はれる。地方伝道を重要視しても教会では『内を見て頂かねばなりません』と云つて出掛ける事を許さぬ、而して妻も子供も見ねばならず物価は日々に高くなつて行くのに俸給は依然として四十五弗である。

時局に憤慨して演説をやれば、『それはお前方の職掌外の事だ黙つて居れ』『アンな事を云ふて果してドレだけの効果があるか』と悪口する。

伝道費の募集をすれば『又か何も出来はせぬ』と云はれる、口さがなき新聞記者は『教役者の働きが足らぬ』と一方からはせめて『又寄付金を募集する』と反対する。

神学生は教授の議論を焼き直して『修養せよ』『反省を促す』と攻め立てる。

自分で立てた各種の伝道計画は教会の総会で否決されて其上自分の不賛成なる伝道方針を強いられる。

機関雑誌の形を変更すれば以前の編輯者は三つ子の様なたゞをこねる、白いと云へば黒いと云ふ。

監督は監督同志で相反目して一方教会の合同独立を主張すれば他はこれに反対する。

熱心に自分の計画を遂行すれば『アレは山師だ、我儘だ』と云ふ。

此間に立つて太平洋岸の同胞を見れば一日は一日と迷ひ迷つて居る、嗚呼吾人は真の教役者に衷心より同情す。

とある。これは教役者の状況を皮肉つてゐるにしても、当時教役者が置かれていた立場をよく風刺している。つまり教役者は攻撃のやり玉にあげられやすい存在であり、かといつて周囲からこづかれても聖職者という立場柄へたにやり返すこともできなかった。

もう一つ重要な理由はアメリカ人教役者のリーダーシップが強い場合、日本人教役者は単なる代弁人、通訳、便利屋以上の実権をもてなくなつてしまふことである。そのことは既述したアメリカ人教役者の影響力からしてかなり重要であると考えられる。たとえば長老教会の場合、牧師を含む教会員は大なり小なりストージの指導を直接間接に受けており、しかも日本人教役者がめまぐるしく代わつたのでストージの考えを無視して青年会や教会に関わる事を決める事は困難であつたと考えられる。メソジスト教会の場合をもつとはつきりしており、教派の構造的問題として牧師の任免権が各個教会にはなく、ハリス(ジョンソン)総理が握っていた。だから自然と牧師よりも総理に権力

が集中するようになっており、日本人牧師も地方の教会に飛ばされないためにも総理に服従せざるを得なかった。この点、組合教会は各個教会主義が徹底しているのでもだましであった。唯一改革教会はアメリカ人教役者が直接日本人伝道を担っていなかったので森牧師の指導力が発揮された。こうしてみていくと各個教会で日本人教役者がリーダーシップを発揮することはなかなか困難であり、次節で扱うようにアメリカ人教役者は高く評価され、又尊敬されることはなかった。

#### (五) 日本人クリスチャンのアメリカ人教役者に対する評価

アメリカ人教役者が日本人教会の形成・展開に及ぼした影響をいくつかの点からみてきたが、最後に日本人クリスチャンはアメリカ人教役者の存在をどのようにとらえ、その活動をどのように評価していたかを見る事で、アメリカ人教役者の影響力の大きさを確認してみたい。

長老派のストーリーは外国伝道局から一八八六年に正式に日本人伝道に任命を受けて以来、長老教会の長老、説教者、青年会の教師、太平洋岸長老派日本人伝道部総理として一九二二年に引退するまで、終始日本人のために働いた（一八八九〜九一年までのドイツ留学の期間を除く）。また排日の嵐の中で日本人を弁護し続けた。日本人はストーリー夫妻を尊敬し、二人から大きな感化を受けた。ドイツ留学のためにストーリーが日本人伝道の仕事をやめ、夫人とともに旅立ったとき、日本人たちは「あたかも自分達の愛する両親を失ったかのように」悲しんだ。<sup>(64)</sup>当時役員会の議長をしていたケールは外国伝道局の『年会報告』の中でストーリーを「彼ほどのすばらしい働きをなしうる人はほとんどない」、「日本人はストーリーを愛しており、彼が戻ってくれば伝道活動に活気があふれる事になろう」と述べ、ストーリーの日本人間での存在の大きさを示している。<sup>(65)</sup>ストーリーは帰国後日本人伝道部に再就任する事になる。

日本人はストージ夫妻からの日頃の恩顧に応えるために一九〇三年一〇月一九日にストージ夫妻の在米日本人伝道十五周年祝賀会を催した。二人への感謝の気持ちを示すために、日本人は一、〇〇〇ドルの寄付を集め、それで二人の日本行き往復旅行券とストージの詩集(*The Spirit of Japan*)を出版して贈った。これはまさに日本人がストージに対して「謝恩の意を表明」するために行ったものであった。<sup>(66)</sup>一九一一年に出版された移民委員会(Immigrant Commission)の報告から当時の日本人の大きな月給額をみると、一九〇三年の時点で料理人が二五〜三五ドル、給仕と家政婦が二〇〜三〇ドル、書生(スクールボーイ)が週給一ドル七五セントであった。<sup>(67)</sup>それゆえ一、〇〇〇ドルは日本人にとって大変な額であったと思われる。日本人のストージに対する謝意の念はどこからきているのか。「桑港通信」『新世界』一九〇三年一〇月九日)はその理由を次のように説明する。<sup>(68)</sup>まずストージはすべてを捨てて日本人伝道に一身を捧げたこと。彼の行った事業は「質素」で表面的に現れないが、「建物の土台石」のように「根本的」である。彼の「哲理眼」は日本の歴史、精神を理解している。しかも彼は「純然たる清教徒の子孫」で「新英国人士の模範」であり「米国人士の模範」でもある。日本人中信者も未信者もみな彼の「高風」を慕わない者はないので、日本人がイエス・キリストを信じるようになるのも遠くはない、と述べた。ここで興味深いのは、ストージの血統が人物評価の材料の一つになっている点で、彼が純粋なアングロ・サクソン・ピューリタンの子孫で、アメリカ人の原型であることが日本人にとってはいかにも有り難い敬うべき存在にみえたことである。

その後も一九一一年一月二日に二十五周年記念会を行うことを長老教会年会として決め、富士見町教会牧師植村正久を招聘して特別伝道キャンペーンを行った。その際日本人はストージの長年にわたる願いに応えるために青年会と長老教会を合同してインスティテューショナル・チャーチを設立する事を提案した。<sup>(69)</sup>その「趣意書」には、

(ストージ)は在米日本人基督者が多くの教派に分属するを極めて不利なりとなし折あらば教会合同を図らんものと常に苦心せら

る、然れば博士指導の下に二五年を経過する桑港日本人長老教会及桑港日本人基督教青年会は二五年を記念するに際し博士の厚意と同情とに酬ふる為め先づ兩者合同して一団となり独立自給のインスチテューショナル教会を建設せんとす

とあり、その実現のために長老教会の土地家屋価格二万ドルを提供し、残りは日本人有志の寄付を募るという計画であった。そして日本人からの寄付を募集するためにストージ脚本の演劇会を八月に開催した。<sup>(70)</sup>ストージと日本人との堅い信頼関係が「博士の厚意と同情に酬ふる為め」という表現で象徴的に表現され、計画そのものは実現できなかったが、教会の方向を決定付けたことを示している。また記念事業の一環として図書館を建て、ストージ図書館と名付けた(日英書籍約二千冊、雑誌約六〇種類所蔵)<sup>(71)</sup>。また同年一月九日には在米同胞有志が主催してストージ及びリチャードソン(領事館雇)の勤労二十五年慰労会を開いた。<sup>(72)</sup>当日二人に記念品として銀製の花瓶が贈られた。ところで、ストージ夫妻の恩顧を受けた日本人は帰国後も二人のことを忘れなかった。彼らは一九三三年一月二八日に「桑港ヘイト会」を組織し、「恩師ストウジ博士御夫妻の徳を偲び、また私共の心からなる敬慕の情を同博士に送り、あの高齢ながらなほ在米同胞求霊の、聖業に奮闘せらるるのを慰め」るための懇親会を持った。<sup>(73)</sup>当日五四人のキリスト教、教育、マスコミ、医療、政治、実業界で活躍する人々が集まり、その会を「ストージ会」と命名した。<sup>(74)</sup>

日本人の示したストージ夫妻への愛着は尋常ではないと思われるかも知れない。しかし、その愛は遙か故郷にいる、今度いつ会えるかわからない肉親への慕情の故でもあった。日本人は「同胞にして博士を識るも知らざるも共に博士及令夫人を生みの両親の如く敬慕」した。<sup>(75)</sup>そして子供のいないストージ夫妻にとって日本人たちはわが子のようにかわいかったであろう。ストージの影響下に、長老教会は青年会との合同を進め、又組合教会と合同して一九一四年に基督教教会となるのである。ここでストージは日本人にとって教師、説教者以上の存在であり、まさに日本の集落の世話役、肝煎りのような存在である。恩や義理に基づく日本の伝統的な人間関係(師弟関係、親子関係)、当時のアメリ

カ・プロテスタントの持つ世界観である、キリスト教文明は優等であり、非キリスト教文明は教化されて向上させられなければならないという発想からでてくるキリスト教文明を教える白人宣教師（先生）とそれを学んで文明化されようとしている日本人（生徒）という上下関係とが絡み合い、しかもストージと日本人との親子愛的關係がより強い結束力となり、ストージの日本人への指導力を堅固なものとしたのである。

メソジスト教会の場合、その教派のヒエラルキー構造からして長老派以上に権力が総理に集中し、当然の事ながらリーダーシップもストージ以上にハリスとジョンソンの裁量にかかっていたのである。しかも二人とも元日本伝道宣教師であり、誰よりも日本人の事を理解していると自負していたから尚更の事である。総理ではないが、メソジスト教会英和学校長として長年にわたって日本人の英語教育に従事した元日本宣教師M・ヴェール(Milton Veil)の感化力も考慮しておく必要がある<sup>(76)</sup>。ハリスは既述したように福音会のメソジスト教会からの分離、かつ教会堂建築の際、排日運動に対する日本人の弁護者として多大に尽力した。ジョンソンも大震災後の教会再建、教会堂建築の際に会堂再築寄付金募集の中心となり教会のために貢献した。またハリスと同様排日運動に対して日本人弁護のために奔走した。こうした二人の総理に対して日本人はストージ同様深く感謝していた。ハリスが赴任した時代は在米日本人メソジスト教会創草期であり、ジョンソンの時代は教会拡張期であると同時に排日運動隆盛期であったが、二人はあらゆる形で日本人のために尽力した。そのこともあって日本人は一九〇一年九月一日にハリス夫妻の在米日本人伝道一五周年記念の祝会を催した。その準備のために太平洋沿岸及びハワイの日本人メソジスト教会から九〇人の代表が選出され、ハリス夫妻のための募金活動を行った<sup>(77)</sup>。

当日こうして募金した金をもとにハリスに一、〇〇〇ドルの小切手と時価一二五ドルの金時計が贈られた。ハリスは一九〇四年に日本及び朝鮮伝道のビショップに赴任するためにサンフランシスコを發った<sup>(78)</sup>。しかしその後もハリス

が帰国するたびにメソジスト教会は彼を招き、伝道集会その他の行事を行った。<sup>(79)</sup> ハリスも日本人の事を忘れず、一九二一年五月八日に亡くなるまで排日運動のさなかで日本人を弁護した。<sup>(80)</sup> ハリス夫人も日本人のために尽くした。そのため彼女が一九〇九年九月七日に東京でなくなったとき、『カリフォルニア・クリスチャン・アドヴォケート』(California Christian Advocate) はハリス夫人について、「ハリス夫人がやった最もすばらしい事はおそらくアメリカを訪れる日本人青年の母であった事である」と評している。<sup>(81)</sup>

ハリスと日本人との間はストーリー同様の強い絆で結ばれており、まさに親子、師弟関係、親分子分より以上であった事が想定される。ハリスは子供を亡くしているのでやはり日本人が自分の子供のように思えたのかも知れない。

ではジョンソンについてはどうであろう。ジョンソンも日本人伝道、排日予防のために東奔西走した。日本人は自分達を排日から守ってくれる力強い守護者として彼を慕い、尊敬していた。ジョンソンもそのことについて強い使命を感じていたので日本人の期待に応えようと終始努力してきた。一九一四年に日本のメソジスト派出出版局に赴任するように要請されたが、彼は当地の日本人伝道のことを思い、それを断っている。<sup>(82)</sup> 日本人はジョンソン夫妻に感謝の気持ちを表するために二人の伝道二十五周年記念として銀製品を贈ったり、又一九一七年には彼の日本及びアメリカでの伝道三十周年を記念して特別伝道を企画している。<sup>(83)</sup>

聖公会も長老、メソジスト派同様日本人伝道のために専任の教役者(パターソン、ジェフエリイズ)を派遣した。パターソンは四年間長野で伝道した後、一九〇一年にサンフランシスコに渡り、自分の家で日本人に聖書と英文学を教え、後に彼女は自費で日本人のために学校を建てた。<sup>(84)</sup> パターソンは過労のために病気になる、静養のためにカナダに戻らなければならなくなっても「日本人の少年達を教育す」ために留まって仕事を続けた。<sup>(85)</sup> まさに彼女の献身的な働きによって聖公会の日本人伝道はその基礎を確立した。<sup>(86)</sup> 日本人たちはパターソンを自分達の「母」のように愛していた。

そのことは次の出来事に象徴されている。一九〇五年に日本人は日本人伝道十周年の記念祝会をバターソンへの感謝会を兼ねて行った。そのとき青木長次郎神学生が代表してスピーチを行い、斉藤牧師とバターソンの事を自分達の「両親」と呼び、自分達の事を「子供達」と呼んだ。そのスピーチへの返答としてバターソンは「あなた（青木—吉田）のスピーチの中で『母』という言葉ほど私の耳に優しく響いてきた言葉はない。あなたがたはしばしば他の国（日本—吉田）の事をしゃべってきたが、時にはあなたがたの英国人の母の事を思い出してほしい」と述べ、日本人とバターソンがお互いにかに強い親子愛でつながっているかを強調している。<sup>(87)</sup>バターソンは一九〇六年にサンフランシスコでの仕事を終え、新しい日本人の伝道地を開拓すべくロサンゼルスに赴いた。<sup>(88)</sup>同年、彼女の後任にはジェフェリーズがついたが、前川真二郎による一九〇九年の日本人伝道報告によると、彼女は一生懸命働き、日本人を「母の愛」(Mother-Love)でもって遇したとあや。<sup>(89)</sup>

こうしたアメリカ人教役者と日本人との信頼関係は、ストージの時に述べたように、親子愛的な絆で結ばれており、しかも日本人の伝統的な恩、義理による人間関係のありようをも手伝ってより強力な結束力となり、アメリカ人教役者のリーダーシップをよりスムーズに日本人間に浸透するものとした。

以上見てきたようにアメリカ人教役者は日本人教会にとってさまざまな局面で重要な役割をはたしていた。アメリカ人教役者にとって日本人は自分達の信念であるキリスト教信仰、キリスト教文明を伝える対象であるわけであるが、それは単なる第三者ではなく手塩にかけて養育した「わが子」のようであった。それ故日本人のために教師として、カウンセラーとして、身元引受人として、弁護者・擁護者として労を厭わなかった。日本人にとってアメリカ人教役者は文明国の宗教を伝える教師であると同時に、困ったときの相談役、擁護者であり、唯一アメリカ人として自分達の無理を聞いてもらえる実の両親のような存在であった。それはアメリカ社会からの日本人排斥の声が高まれば高ま

るだけ日本人のアメリカ人教役者への依存心は強まっていた。また日本人のアメリカ人教役者に対して恩義に感ずる感情も強まった。こうしたアメリカ人教役者と日本人との温情主義的な関係はアメリカ人教役者のリーダーシップの潤滑油ともなった。ではこうしたアメリカ人教役者と日本人との関係がどのように日本人教会の形成と展開に影響を及ぼしたのか、以下ストージを手がかりにして検討してみよう。

## 二、ストージの教派協力（合同）論

ストージの教派協力（合同）論は一九一二世紀のアメリカ・プロテスタント、特に長老派と会衆派が推進してきた教派協力への長い歴史の中から生まれたといつてよい。この問題については別稿でカリフォルニア・プロテスタントの教派協力運動を長老派と会衆派に焦点を当てて論じたので参照されたい。<sup>(90)</sup> こうした教派協力運動の影響下にあってこの運動をカリフォルニアのアジア人（特に日本人）伝道の現場に取り入れ、再展開したのがストージである。

ストージは一九〇六年のサンフランシスコ震災後、サンフランシスコ長老派中会、会衆派のカリフォルニア東洋人伝道部（アメリカ宣教協会）、メソジスト派太平洋岸日本人ミッションに対して教派協力による東洋人伝道を提案した。彼の提案に対して、長老派中会はなにも具体的な対応をせず、また会衆派東洋人伝道部は彼が提案した「組織的会同」（Organic Union）問題について協議するための代表委員を選出するだけで留まっていた。<sup>(91)</sup> メソジストの日本人ミッションは、各レベルでこの問題を検討した結果、ストージの提案する「組織的会同」はとうてい実現できないものであるにせよその中に何らかの実現可能性がないか継続検討した。しかし結論は出ず、討議続行という決定をした。<sup>(92)</sup> ストージは日本人教役者に対しても、同年五月一九日、サンフランシスコ日本人長老教会牧師渡辺敢の送別会の席上で「教会聯合問題」について提案し、討議している。<sup>(93)</sup> しかし、その際の討議内容は定かでない。



ストージが各教派に出した東洋人伝道の教派協力案がどのような内容のものであったか直接被閲できないでいる。それを間接的に知る手がかりになるものとして、当時の日本語有力新聞『新世界』を調べてみると、同紙（一九〇六年五月二五日付）に「桑港各教会合同議」という記事があり、そこには、

同じく耶蘇の教旨を奉して布宣の業に従事するとは言へ兎角桑港の日本人各基督教々会は從來相互の關係に何んとかく円滑を欠き表面一致の歩調なるが如くして其実拮抗反目の態あり為めに布教上蒙る弊害と打撃頗る尠からずとは吾人の嘗て密かに耳にし居たる所なるが近頃或る有力なる某教会監督某博士の説として聞く所に由れば博士の如上の理由を根拠として今回のしんさいを機に桑港各教会の合同を図り以て全く基そあり勢力ある一教会となし是と同時に伝道の大方針を確定し整々たる歩調の裡最も効果ある布教の教会たらしむべき計画を立て居れりと言ふ

とある。「某博士」とはストージ以外に考えられないので、彼の説としてこれを受け取ると、ストージは日本人各教会の教派分離の弊害を除き、教会合同による一致を実現し、分散した力を結集して伝道の実を挙げようと考えていた事がわかる。この点に関して、やや年代が離れるが同紙（一九〇九年八月四日付）の「教会雑誌合同の議」（社説）は、震災後教会合同を打ち出したのがストージであり、彼が「各派打て一丸と為し、一大日本人教会なるものを合同設置」する事を提案した事、しかし各派の牧師が職を失う事を心配した事、又信者の統一を維持するためにこの提案に傾聴しなかった事などその経緯を語ってくれている。これらの記事の内容がすべて事実であるとは判断できないにしても、少なくともストージが教会合同による日本人民族教会を設立する事が日本人伝道の戦略として有効であると考え、震災を契機にその実現を提唱した事は間違いないだろう。しかし、彼の提案はこの時点では支持を得られなかったようである。

ストージの教会合同論とはどのような内容のものであったのだろうか。その内容が具体的にわかるのは一九〇九年になってからである。ちょうど同年八月頃から各教派合同による教会雑誌発行が議論されるようになり、一〇月に

『独立』(一九〇六年十二月に在米日本人長老教会年会の機関誌として発行)を長老、組合、南メソジストを含めた三派合同の機関誌とする所までこぎつけている。<sup>(94)</sup> ストージは一九〇九年十一月頃に彼の書いた「太平洋岸に於ける日本人合同伝道の弁」を配布し、またこの文章は『独立』(第三卷一一号)に掲載されたという。<sup>(95)</sup> ストージのこの文章は『長老教会歴史』(八三―八五ページ)に日本語訳が掲載されているので、それによって彼の教派合同案の内容を検討する事にしよう(原文の所在は不明)。以下はその骨子である。

(イ) 日本のキリスト教会は日本でもその植民地でも「独立」、教派合同という特徴を持っている。そして太平洋沿岸の日本人クリスチャンも「自給教会」の設立を願い、いつまでも外国伝道会社からの補助を受けようとするものではない。外国人支配からの独立、自給をクリスチャンは「常に勇らしき基督者の目標」としなければならぬ。

(ロ) 各地に小教会を散りばめるより、「一の強固な自給せる合同一致の」教会及び伝道所を要所に設け、それらを「一の日本人伝道局の支配の下」に置くことにする。この伝道局は日本人教役者と平信徒によって組織するのが理想である。その構想が実現すれば経済的にお金を有効利用でき、未開拓な地方に伝道する事ができる。何よりも単独でバラバラに伝道するよりも効果的である。

(ハ) この事業は我らの主が望まれる事であり、すべて主に従う者は一つとなるべきなのである。こうした合同は最近の世界の趨勢であり、日本人もキリスト教会のために実行すべきなのである。日本人は欧米人と違ってその実現のための弊害はない。なぜなら欧米人は神学上の論争によって教派が分立したために合同するのは困難であるが、日本人は単なる偶然で特定教派に属しているのであり、教派の教義や神学を研究する事によってそうなのではない。

(二) 日本人教会が合同、独立すれば「日本人が国民的極印を其の教会に容易く押すことができる」だけでなく、それによって同胞がキリスト教を理解しやすくなる。ちょうど英国の聖公会、ドイツのルーテル教会のようである。日本人に対してキリスト教を説くには「日本人自ら之に当り日本人自らの教会」を持つべきである。

(ホ) 合同教会の設立は特に日本人クリスチャンが少ない人口であるアメリカで有効である。なぜならそれ以外に自給教会をつくる方法はないのである。これまでは日本人クリスチャンが「冷淡、無頓着」であったためにこの計画は実現しなかった。しかし本格的に腰をいれて合同教会設立について努力すべきであり、そうすれば実現するのである。

一九〇六年の時点でここまで具体的な考えをストージが持っていたかどうかは断定できないが、一九〇九年の時点でははっきりとした日本人合同教会案を持っていたと言える。しかも彼は『長老教会歴史』(四六ページ)によると、年代は不明であるが外国伝道局から分離独立した日本人伝道局を設立するためにまず「日本人独立伝道局憲法」案をつくって日本人教役者達数名に示していたという。彼の案は『新天地』第二巻第二号に掲載された「伝道局憲法」草案と同じものであったとある。ここにもストージの教派協力(合同)に掛ける意気込みを感じることができる。それは当時の長老教会がとっていた教派協力への趨勢に従ったというだけでなく、彼なりに、この計画を日本人伝道という特殊な課題との絡みの中でより効果的、実現可能な方法として練り上げていたのである。ストージはすでに訪日の経験があり、日本のキリスト教会が外国伝道局から自給独立する有り様をみていたことも彼の根拠になっていたに違いない。ストージの計画はまず教派の「組織的合合同」による日本人合同教会の設立であり、それによって外国伝道局から離れた日本人独立自給教会をつくる事であった。そしてこの日本人教会を日本人による伝道局の管轄下に置くとい

うものであった。この計画の長所は狭い地域に教派ごとに少数分立している一方で地方には未開拓な地域がたくさんあるという日本人教会のアンバランスな現状を打開し、無駄な伝道経費を削減し、効率のいい伝道を行うという点である。しかも外国人から独立した日本人の教会及び伝道局を設立する事で日本人にキリスト教会に馴染みをもたせ、自覚をもたせ、しかも教派協力の実を挙げることができるという所にあった。

ストージの日本人自給独立教会設立案は自らが直接教会活動、運営に関与してきたサンフランシスコ日本人長老教会と、同組合教会の合同による日本人基督教会の設立とその地方への波及によって実現する。また日本人伝道局の設立案は基督教伝道団の設立によって具体化する。

### 三、ストージと伝道団

日本人クリスチャン教役者達が教派協力による団体を組織する努力を開始するのは一九〇九年以降になってからである。その要因としてアメリカ・プロテスタントによる教派協力運動が一九〇六年以降高まったことが挙げられる。一九一〇年のエジンバラ国際宣教会議を経て一九一〇年代には活発な教派協力推進論が登場し、プロテスタント教派は東洋人伝道のための教派協力を提唱し、具体化していく。<sup>(96)</sup>そしてこの教派協力への胎動を日本人教会に導入し、実現するために主導的な役割を担ったのがストージである。こうしたアメリカ教派の動きと同時に、日本人同胞社会内には一九〇九年頃から日本人教役者が日本人の抱える諸問題に応える努力をしていないという批判があり、こういった批判は日本人教役者同士の団結を強め、日本人キリスト教団体を教派協力によって作っていかうとする動きを一層刺激した。また同胞社会内でもキリスト教会の合同を奨励する動きが教派協力（合同）を進める要因ともなった。ここでは日本人クリスチャンによる教派協力団体である基督教伝道団の設立とそれに関するストージの活動を取り上げる。

すでに坂口氏の論文で伝道団については詳しく論じられているので、ここではストージの伝道団への対応について述べる。

一九〇九年一〇月二五日に寺沢久吉宅で開かれた日本人牧師会で「長老教会の『独立』及組合教会の『独立教界』合併」が決議されたのが、教派協力の第一歩であった。<sup>(97)</sup> またサンフランシスコ湾岸の教役者達は同年一〇月三〇日に会合をサンフランシスコ美以教会で持ち、「日本人教役者会なる者を規律正しく組織」し、寺沢久吉（桑港長老教会牧師）を会長に島崎十助を幹事に推薦する事と、「来る四日（木曜）演説会を桑港に於て開き時局に関する意見を發表する」事を決めた。<sup>(98)</sup> そうして一九〇九年一月二二日に開催された教役者会で「北加州基督教閣派諸教会の精神的同盟を作る事」を決議した。<sup>(99)</sup> それを受けて北加基督教教役者会が一九一〇年一月一七日〜二〇日までアラメダ南美以教会で開かれ、

一 北加基督教徒同盟を組織する事（次回の会合には教会代表者の出席を得教会同盟を組織する筈大久保牧師を会長に川島牧師を幹事に推薦したり）

一 伝道上余裕の存する限り大に矯風運動に従事すべき事

一 基督教徒同盟に於て一の機関誌を發刊する事（同盟に於て新に一の機関誌<sup>ヤ</sup>を起し従来諸教会にて發刊し居れる福音及び独立等の諸<sup>ヤ</sup>誌を一切譲り受くる目的にて是か交渉委員を選定せり）

を決議した。<sup>(100)</sup> 同盟の目的はクリスチャン同志の「親睦を厚」くし「福音を宣伝」し「社会道德を進」めることにあり、各教会の教役者と信者によって構成されていた。<sup>(101)</sup> この会合によってクリスチャンが懸案としていた矯風問題への組織的対応、教派機関誌の合同という問題は教派協力による同盟設立によって一歩前進したことになる。

その後、加州基督教徒同盟とは別に実践組織として基督教徒同盟伝道団をアメリカのレイメンズムーヴメントをまねて作る事が一九一一年四月二一日の会合で決まり、五月一三日に設立された。<sup>(102)</sup> この伝道団は組織としては独自に団

長などの役員を置き、維持会員からの寄付によって活動資金を得るものであり、当時のクリスチャンへの批判に応えようとする試みであった。この伝道団は矯風、啓発運動で一応の成果を挙げた。

日本人クリスチャンの教派協力は更に進展し、一九一一年九月四〜六日に開かれた伝道団の会合で、加州基督教徒同盟と伝道団を合同することが決議され、北加基督教徒同盟伝道団が発足することになる。<sup>(10)</sup> 組織的には以前の伝道団と殆ど変わらず、ただ新たに常置委員を設け、常置委員会と評議委員会と両方で団体の運営を行う形にした。評議委員は各教会代表から構成され、評議委員の中から常置委員を決める事になっていた。常置委員は定期的に集まり伝道団の実務、会計、事務を協議する事になっていた。ここからもわかるが、以前の伝道団よりもっと体系化された組織になっていた。<sup>(10)</sup> この伝道団は一九一三年に南加基督教徒同盟と合同して基督教伝道団となる。

ストージの教派協力(合同)案がどれほど日本教役者を動かし、結果として伝道団を生んだのかを示す具体的な資料に被閱できていない。ただ彼の基督教伝道団に対する積極的な支援の姿勢と彼の伝道団への期待からして、ストージの考えをある程度伝道団が実現していたものであると推測できよう。なお後述するが、一九一二年一月二日の太平洋沿岸東洋人伝道に従事するアメリカ人伝道者の年會にストージは伝道団に関する議案を提出している。ストージは彼の考えていた日本人伝道局案を伝道団を通じて実現しようとした事がその内容から明かであり、彼の伝道団への期待の大きさが伺える。以下はストージの伝道団への貢献ぶりである。

伝道団は運営上専任幹事を置く必要性に迫られ、当時サリナス長老教会で牧会をしていた小林政助をその候補者としてたてていたのであったが、交渉が難行していた。しかしストージの働きで長老派の教役者たちも動き、一九一二年三月一日に小林は幹事として着任する。<sup>(10)</sup>

次にストージは伝道団が行っていた巡回伝道に協力して、各地で演説を行っている(一九一二年六月にサクラメント、

フローリン、一九二二年二月にサンフランシスコ<sup>(106)</sup>。

財政面でも、ストージは伝道団のために五〇ドルの寄付金を行った<sup>(107)</sup>。また伝道団への寄付金集めのために作ったパンフレット(A New Evangelical Movement Among the Japanese on the Pacific Coast, October 1, 1912, SPTS)の中で二種類の推薦状を伝道団のために載せている。一つは同年一〇月二六日付のもので、伝道団ではクリスチャンが同一目的のもとに一つとなり、同胞の救いのために申し分のない働きをしており、伝道団への寄付は同胞救済のために有効に使用される事間違いない、と推奨している。二つ目は同年一〇月一六日付のもので、小林政助の紹介状であり、小林が以前は長老教会の一員として伝道上成果を挙げ、今度は伝道団幹事として働こうとしているのでよろしく、という内容である。ちなみにストージ以外で伝道団のために個人として推薦上を載せているのは伝道団の巡回伝道者となるH・ガイとH・ジョンソンだけである。ここでもストージの伝道団に対する熱意を感じる事ができる。

一九二二年一月一二日にサンフランシスコのYMCAで開催された太平洋沿岸東洋人伝道に従事するアメリカ人伝道者の年会に提出したストージの伝道団に関する議案は彼の伝道団に懸ける彼自身の希望をよく表している。当日ストージは伝道団について次のような議案を提出した<sup>(108)</sup>。

- 一、太平洋沿岸日本人伝道に従事する教役者(米国人)は、各派伝道局に伝道団の承認を熱心に勤むること
- 二、将来に於て、各派の在米日本人に対する伝道は、伝道団を通して為すこと、但同时に伝道団は合同伝道局となるべし
- 三、各派の総理は、其各派の代表者として合同伝道局の評議員たるべし
- 四、各派よりの伝道金は、一千九百十四年より毎年一割宛を減じ、十カ年後には日本人伝道事業は全く独立するに至らしむること
- 五、各派よりの代表者は、補助金の額に比例して其数を定めること
- 六、教派伝道局の所有に係る、日本人伝道の目的に使用する財産は、独立とともに最後の寄付として合同伝道局に付与すること

ストージの提案は既述した日本人伝道局案を反映しており、教派合同による日本人の独立伝道局設立を目指すもので

あった。彼は伝道団設立を契機に一気に日本人伝道局案を実現させようとしていたかにみえる。しかし彼の提案はそのままでは受け入れられず、大幅修正の後に出された決議は、伝道団に協力、援助、財政補助をする事を可決するという全くおとなしい内容であった。<sup>(10)</sup> ストージ以外の、他教派からの出席には彼の構想はそのままでは受け入れられなかったのである。

ストージの提案が否認されたからといって、日本人伝道局案の実現が遠のいたとはいえない。一九一三年一月二五〜二八日の伝道団の会合で北加基督教徒同盟伝道団と南加基督教会同盟が合同して基督教伝道団を設立する事が決定された。<sup>(11)</sup> 英文名は The Japanese Inter-denominational Board of Missions であり、太平洋沿岸の日本人キリスト教会教役者と伝道団の目的に賛助する者によって構成された教派協調伝道局であった。組織的には以前の伝道団よりもっと大規模、緻密になっていた。組織の運営は年会、常置委員会、役員会で審議、決定され、会計、幹事、巡回伝道師等が実践部隊として伝道団を切り盛りする事になっていた。活動資金は以前同様賛助者からの募金に頼る事になっていた。

伝道団にストージは他のアメリカ人教役者と共に「顧問」として関わった。これをみると伝道団は一応ストージが考えていたような「合同伝道局」的な組織に近い教派協調組織であり、日本人が伝道活動の主導権を持つ団体であった。彼の考えるように日本人伝道に関わる各派の総理が「評議員」とはならなかったが、「顧問」という形でその伝道活動に参加した。先述したように、顧問と言っても実際に顧問は各教派とのパイプ役である他、アメリカ人への啓発運動を担い、伝道団の活動を積極的に援助していた。単なる顧問というよりも実質的には日本人だけでは出来にくい活動を任せてしまっていた。また伝道団の活動経費もすべて日本人ではまかないきれず、顧問を通じて各教派から補助金を出してもらっていた。伝道団は前述したように一九一五年一月の年会で中央基督教伝道団、北加基督教伝道



団、南加基督教伝道団という三団体に分かれることになるが、三団体とも顧問をおき、ストージは引き続き伝道活動に参加する事になるのであった。

さてストージは伝道団の設立をどのように評価し、どのように関わったのだろうか。ストージは伝道団を彼が意図していた「合同伝道局」そのものであると評価をしたのかどうかはわからないが、彼はその設立を非常に喜んでいる。ストージの喜びを紹介しよう。彼はちっさく“*Our Star of Hope*”という詩を作り、この詩は伝道団機関誌『新天地』（一九一三年二月号）に掲載された。

#### OUR STAR OF HOPE

O Dendo Dan, our morning star,  
Shine on, till all receive the lights!  
Send out thy guiding beams afar,  
And every form of evil fight,  
Till night, rebuked, shall flee away,  
And darkness be replaced by day!

O Dendo Dan, thou lamp of love,  
The people will supply the oil,  
And God will give thee from above  
The Holy Fire, reward thy toil,  
Till Christ, the Light of Life shall come,  
And everywhere His will be done!

彼は伝道団を「明けの明星」(morning star)に例えてその設立を讃え、この活動が「愛の太陽」として伝道にエネルギー

ギーを与える事を希望した。また彼が書いた“The Union of the Dendo-Dan and the Church Alliance”（『新天地』一九一三年三月号掲載）では、北カリフォルニアの伝道団を「新郎」に、南カリフォルニアの同盟を「新婦」に、今回の南北カリフォルニア団体の合同を「結婚」に、小林政助を「仲人」にたとえ、合同による伝道団設立（結婚）を心から喜ぶとともに、伝道団の行く手に祝福がある事を願っている。また一九一四年度の長老派外国伝道局の『年会報告』（Annual Report）では、伝道団は地方に分散する日本人への伝道事業に優れた働き（excellent work）をしていること、教派同士をより密着せしめたこと、そしてカリフォルニアの日本人伝道に関わるすべてのプロテスタント教派による連盟を可能にしたこと、などについて高く評価している。また長老派の伝道も以前よりも教会連盟のような組織のもとに伝道を行うことを目指していることを報告している。<sup>(11)</sup>

ストーリーは伝道団設立を祝うだけでなく、積極的な協力をも行っている。ストーリーは長老派伝道局へ伝道団への資金援助をするよう交渉し、実現させた。伝道活動面では、一九一三年排日土地法制定問題に対して反対声明、檄文で反対する他、啓発運動に加わって日本人弁護に努めた。

最後に伝道団とストーリー個人との関係を極端に表した事件について言及してこの章を終えたい。伝道団は「大正天皇」即位式が一九一五年十一月一〇日に举行されるに際し、この「大典を奉祝」するために在米同胞より英訳聖書を「献上」することを企画した。聖書は米国聖書会社に特注し、その費用約三三〇ドルを在米同胞から募金する事にした。そして聖書を献上する役として伝道団はストーリーを選び、宮崎小八郎が彼に同伴することになった。<sup>(12)</sup>『新天地』（一九一五年一〇月）掲載の「聖書献上資金領収」報告によると、この時点で三一・一ドル五セントの寄付が集まっており、まずまずの集金高であった。八月一日にサンフランシスコ市公会で開かれた世界聖書大会で「献上聖書献本式」が举行された。<sup>(13)</sup> ストーリーは一〇月七日に「私共は御即位に際し在留日本人を代表して英文聖書献上の光榮を有します、

之は御即位を祝するの微衷と 日本人の忠義<sup>マヤ</sup>を示す微意とに外ならぬのであります」という内容のことを述べて聖書を「献上」した。<sup>(14)</sup> こうした在米同胞にとつては極めて重大な役割をストージに依頼するという態度は、まさに伝道団とストージとの信頼関係を如実に示しており、ストージの伝道団、在米同胞への献身的姿勢がよく示されている。

ストージは伝道団を積極的に支援し、自らその活動に関わっていた。彼の姿勢を動機付けているものは、ストージの日本人伝道への使命観であり、彼の日本人との堅い信頼関係であったであろう。しかしもう一つ重要なのは、ストージが教派協力による日本人伝道に日本人伝道の有るべき姿を見いだしていたからであった。そして教派協力は日本人が最終的に教派の伝道局から独立自給していくための手段であった。彼の構想からすると、教派協力は伝道団設立で終わるのではなく、それを通じて日本人教会の合同を達成するところまで行かなければならなかった。実際、ストージはこうして伝道団に積極的に関わり、その関わりを通じて彼の悲願である合同教会の設立を達成する土台を築くのである。

#### 四、教会合同とストージ

ストージが願っていた教会合同実現の試みは伝道団を中心に、まず日本人教役者の手で展開される事になる。一九一一年二月二七日より三月二日までフレズノで開催された日本人教役者大会の第二日目(二八日)に、教会合同について議事懇談された。<sup>(15)</sup> 結局議事は三日目まで継続され、教会合同を可決し各派より一名の代表者を選出し、代表者をして合同の方法及びその後の方針に関して研究を行い合同の目的を貫徹することになった。その際代表者とし広田善朗(メソジスト)、宮崎小八郎(長老)、前川真二郎(聖公会)、福島熊蔵(組合)、森淳吉(改革)、太田儀三郎(南メソジスト)が各派から選出された。<sup>(16)</sup> 伝道団は教会合同を実現するために委員会を設け、日本人教役者の力でその端を開こうとす

る。伝道団は一九二二年五月七、八日に開かれた常置委員会で教会合同を推進するための教会合同委員として、小室篤次（メソジスト）、宮崎小八郎（長老）、福島熊蔵（組合）、前川真二郎（聖公会）、森淳吉（改革）、太田儀三郎（南メソジスト）、安孫子久太郎、森下亀太郎（メソジスト）を選出した<sup>(118)</sup>。教会合同委員は六月一二日に集まって協議しているがその内容は定かでない<sup>(119)</sup>。九月一七日の第三回常置委員会で教会合同委員の報告があり、この件について事業を継続するための新委員を選出した（小室、宮崎、太田、森、小平国雄、堤塚敬次郎、安孫子久太郎、森下亀太郎<sup>(120)</sup>）。南北基督教団体が合併した後、伝道団は一九二三年一月二七、二八日に常置委員会を開き、南北それぞれの支部で政治、財政、教理、聯合などの項目について調査する事になった<sup>(121)</sup>。伝道団機関誌『新天地』（一九二三年六月、二ページ）には「教派合同」という論説が掲載されるようになる。この中で教派分立がいかに「無益な論争と有害な党派心と不経済な伝道法」を生むかが説かれた。五月八日の伝道団常置委員会は教会合同について、「合同に関する意見を具して各派米国人伝道局当局者に致すこととして之が実行をさき三名の委員に託す」ことが決定し、宮崎、小室、小平が選ばれた<sup>(122)</sup>。そして同日、アメリカ人教役者と常置員の懇親談話会を開き、時局問題、教会合同等について相談した<sup>(123)</sup>。結局日本人だけでは教会合同を論じてもらいがあかないので、アメリカ人教役者の協力を依頼する事になる。そしてそのことで教会合同に向けた歯車が動き出すのであった。

ストージはサンフランシスコに日本人教会最初の教派合同教会である日本人基督教会が一九一四年に設立されるまで一貫して積極的に教会合同問題に関わっている。それは彼が教会合同に関する委員会に殆ど全て出席している事からもわかる。委員会は、教会合同によって組織される日本人教会の柱となる米国日本人基督教会の信仰告白、憲法をアメリカ人教役者の協力を得て作成した。そして教会合同を在米日本人教会に浸透させるための組織である米国日本人基督教会同盟が設立され、これらによって教会合同実現の枠組みがほぼ完成する。

## (一) 米国日本人基督教会

一九一三年八月二九日、基督教伝道団事務所にストージをはじめとする日本人及びアメリカ人教役者が日本人教会の教会合同を実現するために集まった。彼らは、四教派からの代表者で、ストージ（長老）、宮崎小八郎（長老）、秦庄吉（組合）、小平国雄（組合）、福島熊蔵（組合）、H・H・ガイ（キリスト）、今井三郎（ユニオン）の顔ぶれであった。これらの出席者のうちストージ、宮崎、福島はサンフランシスコの日本人教会の代表者であった。この会合では教会合同に賛同する各教派の教会からもっと多くの代表者に集まってもらい、九月一七日に再び会合を持つ事と、合同教会の信仰告白及び教会憲法の草案をガイ、小平、宮崎が作成する事を決めた。<sup>(12)</sup>

第二回の会合は九月一七から一八日に開かれ、ストージ、秦庄吉、小林誠（長老）、福島熊蔵、宮崎小八郎、小平国雄、河合楨三（キリスト）、馬場久成（長老）、今井三郎、安孫子久太郎が参加した。メソジスト派については、伝道団で教会合同のための委員として日本人メソジスト教会牧師が選出されたにもかかわらず、この会合に出席していない。その最大の理由はメソジスト派日本人伝道総理であるH・ジョンソンが教会合同に反対の立場をとっていたからである。ジョンソンは、一〇二の総理が教会合同を推進しているが、私の判断ではこれは「賢明でない」(eslavian)。なぜならこうした構想はアメリカの地で日本人独立教会を生む事になり、日本人のナショナルリズムを盛んにし、アメリカ人教役者や他の人々の同情や道徳的支援を切る事になってしまう。本当に必要な事は方法と努力における合同であり、それ故「組織的<sup>(13)</sup>合同」は不必要である、と述べた。ジョンソンは伝道団のような教派協調運動には支援したが、アメリカ教派から分離した日本人独立教会を生むような教会合同案には賛同しなかったのである。そしてアメリカ人総理の姿勢が日本人メソジスト教会総体の教会合同への姿勢を決定してしまったのである。

この会合で草案をもとに信仰告白及び米国日本人基督教会憲法が制定された。信仰告白は次の通りである。<sup>(14)</sup>

我等は主耶穌基督と聖靈とを通して顯されたる我等の父宇宙の主宰者なる独一の神を信ず

我等は神の独子にして世を救はんために人となり死して甦り今尚ほ我等と偕に在し給ふ聖靈を信ず

我等は神の啓示によりて成れる我等の信仰の則なる聖書を信ず

我等は罪の赦し 永遠の生命 聖徒の一致 水のバプテスマ 聖餐式 聖き主の日及び聖き生活を信ず

次に憲法は要点のみを挙げる事にする。

教会―名称は米国日本人基督教教会。神を礼拝し、潔い生活をし、神の国を拡める為の集まり。

礼拝―祈禱。讃美、聖書朗読、説教、献金、祈禱からなる。聖礼典はバプテスマと晩餐からなり、教師がそれを司る。

教師、牧師、伝道師―教師はキリストの福音を伝えるために按手礼を受けた者。牧師は牧会の任ある者。伝道師は規則に従って部会の批允を受けた者。

長老、執事―役員は長老と執事とから成る。長老は牧師を補佐して教会教務にあたるために規則に従って選出された者。執事は教会の事務を執行する者で規則によって選出された者。

役員会―牧師、長老、執事からなる。会員の入会、転入、転出、会員の指導、聖礼典の準備、その他日曜学校や教会の伝道の監督などを行ふ。

部会―部会に属する牧師及び教会の代表者、伝道師より成る。教会の設立、解散、合併、牧師の就職、解職、伝道師の批允、退職、処分等を決める。役員会、教会、教会にならない信徒集団に助言幫助をあたえる。

総会―総会に属する牧師、各教会代表者、伝道師より成る。部会の設立、解散、教師の任免、処分等を決める。憲法、信仰告白に従って各部会、教会の秩序を維持する。伝道局の設立、教育その他の事業を企画することができる。

憲法及信仰告白の改正―部会から総会に改正案を提出し、総会が改正を認めた場合おこなう。

教会にとってこれらの本質的な事柄を決めるに当たってはかなりの議論がなされたようである。特に信仰告白については、その起草委員の一人であった小平国雄によると「未だ皆でなき程、火の如き議論ありしと、初日の如きは、起草委員に対して質問の矢放たれ、何時止むべくもあらで翌日に続き、相互口角泡を議論せし結果、円満なる合同を見るに」至ったとある。<sup>(128)</sup> これらを見て気づくことは、信仰告白は福音同盟会のそれと同じものであるということである。つまりアメリカの教会で標準的に使用されている信仰告白を採用したという事である。しかし憲法のほうをみると、牧師、長老、執事によって教会政治がなされるというように、長老主義のものである。しかも役員会、部会、総会は長老政治での小会、中会、総会に当たる機能を持っていた。つまり委員会は教派を脱してキリストにある教会という事で「基督教会」という名称を用いて、在米日本人伝道の理想型を提示しようとしているが、その教会政治に於いては長老制という特定の教派のスタイルを導入していた。

この会合を受けて、教会合同を実現するための常置委員一名が選ばれた。その顔ぶれは、ストージ、ガイ、ヒンマン、小平、福島、今井三郎、宮崎、及び信徒同盟より森下亀太郎（メソジスト）、小池実太郎、安孫子久太郎、杉村力之助（長老）であった。委員会は一九一三年一〇月三日に合同教会のあり方について協議し、以下六点の内容を決めた。第一に、合同教会は毎年一〇分の一ずつ補助会を減らしていき、一〇年後に完全な独立自給を達成する計画をし、仮に定められた信仰告白及び憲法を付けて白人伝道局の賛成を請願する事。第二に、教会合同についてはメソジスト派や改革派内にも賛同者がいるので、再度安孫子他二名を委員として交渉を依頼する。第三に、この合同運動を公表するために宮崎、福島、安孫子を委員として選ぶ。第四に、教会合同を実行するために諸種の運動を展開し、まず手始めとして各地の教会を勧誘するための特派員を選ぶための人選員としてストージ、小平、宮崎が選ばれる。第五に、

教会合同賛成の各教会はこの運動のための資金を分担する事。第六に、次回の会合は二四日にストージ宅で開く事、であった。<sup>(117)</sup>

メソジスト派はこれに対して、ようやく重い腰を上げ、一〇月二四日にメソジスト教会部会が「我等は各種の教会及び伝道局の協賛を得て教会同盟の同盟問題（フエドレーション）の実行を計り他教会より指定せらるべき同様の委員と協力せん為に我教会より委員選定の必要を認む」という決議をした。そしてその委員としてジョンソン、川島末之進、小室篤次、吉田森蔵が選ばれた。<sup>(118)</sup>常置委員会は一月二一日にジョンソンと会合を持ち、その際メソジスト派の教会合同に対する考え方が常置委員とほぼ一致することがわかったので、交渉委員（ストージ、ガイ、ヒンマン、安孫子、小平、今井、宮崎）をたててメソジスト教会との交渉を本格的に開始した。

教会合同はその後どのように進んだのだろうか。メソジスト派は口では教会合同を奨励していたが、それほど積極的な支援はしていない。しかし長老派と組合派は傑出した動きをした。長老教会年会は一九一一年五月五日の年会ですでに、太平洋沿岸のキリスト教各派の合同完成を希望し、各派との交渉を常置委員に一任する、という内容の決議を行っていた。<sup>(119)</sup>組合教会年会も一九一二年五月二、四日の年会で「教会合同につき秦、小平、福島<sup>(120)</sup>の三氏を委員に挙ぐこと」を決議した。<sup>(121)</sup>そして長老教会と組合教会は一九一四年五月六、一〇日に開かれる年会を合同して行うことにした。まず長老教会年会は四教派の合同に賛成し、在米日本人基督教会の信仰告白及び憲法を承認した。そしてその担当委員としてストージ、宮崎、小林、成田良太、及川勇五郎<sup>(122)</sup>をあげた。一方組合教会年会は教会合同に就いて協議したが、具体案がなくなかなか決着がつかなかった。しかし投票の結果八対六で他三派との合同を決議した。このように組合教会内での足並みが揃わなかった原因の一つとして、教会合同が組合教会年会総体として取り組まなければならないというほど逼迫した問題ではなく、当面該当するのは一、二教会にだけであつたからであるという。<sup>(123)</sup>結局年



会は代表委員として田中義一、辻密太郎、小平、福島、川田拳をあげた。これら二派の代表委員はあらためて特別委員（宮崎、小平、今井、河合）を選んで、信仰告白及び憲法草案を依頼した。その後八月にできた信仰告白及び憲法は、信仰告白文より「水のバプテスマ 聖晚餐」を削除した外は米国日本人基督教会のそれと同じであった。<sup>(13)</sup>

## (二) 在米日本人基督教会同盟

教会合同委員はその意図を在米日本人教会に広く浸透させ、目的を実現するために推進組織として在米日本人基督教会同盟を設立する。それぞれの教派の代表者は一九一三年一月六日に会合を持ち、教会合同を推進していくための在米日本人教会同盟の憲法を決めた。教会同盟の目的は「米国に於ける日本人教会の合同を精神上にも事実上にも増進し且つ助長し、共同の事業を実行する為協議し、方法を案出し、在米の日本人に基督教の福音を宣伝し、教会員の徳を樹てんが為地方の諸教会を助け又之を奨励し、事情の許す限り速に同盟教会及伝道館を組織するにあり」であった。<sup>(14)</sup>一九一四年一月五日に再度会合を持ち、「在米日本人基督教会同盟憲法」七箇条を可決した。同盟設立によって教会合同推進母胎ができたわけであるが、メソジスト派は憲法に同意できなかったもので、参加しなかった。一九一四年一月二日の第四回伝道団年会で、宮崎が教会合同及び同盟のこれまでの経過を説明し、ストージ、ジョンソン、網島佳吉、その他が意見を交し、同盟憲法を承認し、議案として年会に提出するために伝道団の役員と交渉する委員を選んだ（ストージ、小室、安孫子、河合、福島、今井、宮崎）。<sup>(15)</sup>結局同盟憲法は賛成可決されたが、秦庄吉より動議があり、同盟案を調査して明日再度提出することになる。その際、調査委員として、広田善朗、小林政助、田中義一、秦、川崎、河合、安孫子、福島、今井、小室、宮崎、兼子、太田、ジョンソン、ストージ、ガイ、ヒンマンが選ばれた。一月二四日に再度教会同盟案が提出され、年会は同盟憲法に賛成すること、これを各教会に提出し賛同を求めること、

委員を設けてそれを実行することなどを賛成可決した。そのときに委員に選ばれたのは、安孫子、小平、村上、金子、今井、宮崎、ストージ、ジョンソン、ガイ、ヒンマン、アクトンであった。

在米日本人基督教會同盟憲法草案によつて同盟の目的、組織形態を見てみよう。<sup>(136)</sup>

第一条 名称 本同盟の名称は之を在米日本人基督教會同盟と稱す。

第二条 目的 本同盟の目的は米國に於ける日本人基督教會の合同一致を精神上にも事業上にも増進し且つ助長し、共同の事業を實行する爲め協議し、方法を案出し、在米の日本人に基督の福音を宣伝し、教會員の樹てんが爲め地方の諸教會を助け又之を奨励するにあり

第三条 本部 本同盟の本部は之を加州桑港市に置く

第四条 總會

第一項 機能 同盟の代表団体は之を總會と稱すべし。總會は同盟全般の事業を檢閲し同盟の役員及各部の委員を選挙し、宗教雜誌、伝道及教育事業、社会的奉仕につき同盟の實力が許す範圍内に於て計畫を立つべし

第二項 代表者 a 正当に組織されたる地方の發會及伝道館にして本憲法を受納するものは其牧師と一名の會員を代表者として總會に出席せしむるの資格を有す。

b 本同盟に参与する伝道會社の総理又は他の代表者は職務上の總會の會員たるべし。

第三項 集會 a 總會は幹部會に於て定めたる時と場所に集會すべし。集會を催す時には其集會の一カ月前特に時と場所とを明記したる通知を教會及伝道館に發すべし。

b 孰の總會と雖も代表者廿五名をもつて定数とす。

第五条 幹部會

第一項 職務 本同盟の行政体は之を幹部會と稱す。幹部會は憲法の規定に則り本同盟の要務を處理し、各部門の當局者を指定し、同盟教會の牧師を推薦し、各部門又は委員の事務を監視す。

第二項 幹部員 幹部會は本同盟の役員、各伝道會社の総理又は他の代表者及各部門の長をもつて組織す。

第三項 a 幹部會の例解は三月に一回之を開くべし。臨時會は同盟會長又は幹部員三名以上必要ありと認めたる時之を召集すべし。

b 出席幹部員七名を以て定数とす。

第六条 役員 本同盟の役員は会長、副会長、幹事、会計各一名とす。

第七条 修正、改正及規則

a 尋常総会は出席代表者三分の二の同意を得ば本憲法を修正、改正することを得べし。修正又は改正案は之を一カ月以前に総会の代表者の報告すべし。

b 幹部会は本憲法に抵触せざる範囲に於て規則を制定することを得。

憲法からわかるように、同盟は伝道団の別動隊として在米日本人教会の教会合同、一致を達成する事を目的とした日本人、アメリカ人兩教役者共同の教派協調団体である。では同盟はその当初の目的を達成するために何をしたのであろうか。一九一四年二月一九日に教会同盟委員会が開かれ、教会同盟憲法に一〇二の修正を加える事、同盟憲法を英文和文で印刷して諸教会に配布すること（調査委員…ガイ、安孫子、宮崎）、同盟に関する誤解を解くために諸教会を訪問して説明をする事（遊説委員…小室、宮崎、小平）、同盟費見積額一〇〇ドルを信徒有志の寄付でまかなう、正式の同盟が成立するまで役員を定める（委員長ヒンマン、書記小室、会計宮崎）事を決めた。<sup>(137)</sup>『新天地』一九一四年四月号一〇ページには「教会同盟組織顛末」を基督教教会同盟委員会の名前（一九一四年二月筆）で掲載しているが、これは同盟の宣伝活動の一環であろうと思われる。

在米日本人基督教教会同盟がその後どのように日本人教会の合同推進運動を展開したかわからない。しかし合同推進運動はその後の長老、組合兩教会を中心とする一九一五年の教会同盟の組織化と、それによる協力伝道を生んだのである。<sup>(138)</sup>

教会合同達成のための日米教役者の努力はこうして在米日本人基督教教会同盟と米国日本人基督教教会の信仰告白及び憲法を生んだ。これによって日本人合同教会設立の枠組みができたことになる。ただここで指摘したいことは、教会

合同を積極的に推進したのは四教派だけであり、しかも合同推進教会内にあっても組合教会のように必ずしも足並みが揃っていたわけではなかった事である。また米国日本人基督教会という名称といい、その憲法といいかかなり長老派色の強いものであった。

日本人教会の合同は日本人クリスチャンのみの力では達成されず、こうしてアメリカ人教役者の強力なバックアップを受けてその輪郭ができあがったのである。ストーリーは米国基督教会の信仰告白、憲法成立過程、基督教会設立方法策討議過程、在米日本人教会同盟設立過程の全てに関わり、その中で彼自身の教派合同案の実現過程を一步一步登っていったのである。

## む す び

カリフォルニア日本人教会の急激な教会合同への動きを全てストーリーの功績に還元する事は到底できない。またそのようなことを論証するのが本稿の意図ではない。ここで言いたい事はいかにアメリカ人教役者であるストーリーが日本人教会の教会合同のために尽力したかであり、しかもその教会合同が明らかに日本人民族教会の存続、発展のために行われたものであったということである。

日系アメリカ人教会の形成・展開を考えると、アメリカ人教役者が直接、間接にどれほど関わってきたかを見落とせない。まず日本人教会は構造上母教派から派遣されてきたアメリカ人教役者を無視できなかった。それは日本人教会が教派からの支援、協力を受けて設立された事にもよる。そして設立後も教派の伝道局の傘下において教派と日本人教会をつなぐ窓口ともいえるべきアメリカ人教役者の指導、協力を得ていた。長老、メソジスト、会衆三派の場合日本人年会をもち、組織的にアメリカ人教役者である総理の管轄下におかれていた。アメリカ人教役者の影響力は個別

教会にも及び、ことサンフランシスコの日本人教会は改革教会を除いてアメリカ人教役者が教会運営、活動の主導権をある程度握っていた。この点について日本人教役者は教会内で最も采配をふるいやすい立場にしながら、実際は信徒や同胞社会から出てくる諸要求、批判をこなすのに汲々としていた。

こうした日本人教会の構造上からくるアメリカ人教役者と日本人との関係——主従関係、師弟関係——は単なる殺伐とした上下関係、支配被支配関係ではなく、極めて濃厚な温情的な信頼関係で結ばれていた。それはアメリカ人教役者が日本人のために牧師、教師、身元引受人、弁護者、擁護者、カウンセラーとして尽力したこと。一方日本人も親身になってくれる人のないアメリカ社会で本当に頼れるアメリカ人教役者を信頼し、尊敬し、自らの「父母」のように慕っていたからであった。そのためあって日本人はアメリカ人教役者への日頃の恩に酬いようとして慰労祝賀会や特別企画を行ったり、ときには教会の将来を方向付ける事柄についてアメリカ人教役者に身をゆだねるようなこともあった。

アメリカ人教役者と日本人との温情的関係は日本人クリスチャンの教会協力(合同)運動にも影響を及ぼした。本稿ではストージをケーススタディとしてとりあげた。ストージと日本人との関係はここでいう温情主義的關係の典型であった。ストージは日本人教会の教派協力(合同)による一大日本人教会の設立と日本人伝道局の設立を一九〇六年以降提唱した。彼の構想は、一九一〇年代になってエジンバラ会議、アメリカ・プロテスタントの教派協力運動、同胞社会内部からのクリスチャン教役者批判と教会合同の奨励の声も手伝って伝道団設立にまで展開されていく。ストージは伝道団に彼の日本人伝道局案の実現を託した。ことは他教派をも対象にすることであったので彼の思惑通りには実現しなかった。しかしストージは伝道団の設立を喜び、援助、協力を行っていく。そして伝道団を梃子にして彼の悲願である日本人教会合同のために努力し、ついにその実現の基盤となる米国日本人基督教会の信仰告白及び憲法の

制定、その実践部隊としての在米日本人基督教会同盟を生み出すに至るのである。

ストージの教派協力(合同)案はいくつかの点で重要な意義があった。まず、在米日本人キリスト教会にとつてである。日本人教会は、一九〇〇年代になって日本人移民が太平洋沿岸各地に大量に入り込んで行くのと平行して地方伝道を行ってきたが、各教派がそれぞれの思惑を持って分散した伝道活動を行っていたため、伝道活動が効果的に行えなかった。伝道活動をむらなく広く浸透させるためには各教派が協力して組織的な伝道戦略をたてて行う必要があった。また日本人人口が増加していくとともに同胞社会も多くの取り組むべき課題をもつようになり、また一九〇六年以降排日の声が除々に高まって行く中で、日本人クリスチャンとしても各教会なり各教派だけで対応するには限界にきていた。これには、教派協力によって連帯して対応するより他はなくなっていた。同胞社会はこうした日本人クリスチャンのかかえる弱点、不十分点をさかさ見抜き、批判、激励の声を挙げていた。それゆえストージの立てた教派協力(合同)案は時宜に適したものであった。一九〇六年に彼がこの構想を提案した際にはまだ諸条件は整っておらず、むしろ水面下でことが進んでいた。一九一〇年前後になってストージの構想は具体的な形で登場し、教派協力運動の進展によって各教派も教派利害を越えた協力関係をもつことが可能になり、同胞社会の切迫した状況は日本人の教派協力(合同)運動に迫車をかけた。伝道団の設立はこうした脈絡の中で現れてきたのである。ストージは伝道団が南北に分かれた後も在米日本人伝道において教派協力による日本人伝道局が必要であることを提唱し続け、一九二〇年一〇月の内国伝道局による「アメリカ合衆国太平洋岸、東洋人伝道」の会議でも、日本人伝道のために教派協力がいまだに必要であること、伝道団に代わる組織として北加基督教会同盟を諸教派が支え、効果的な伝道活動をおこなうべきであると訴えている。そして日本人ばかりでなく、中国人伝道にあっても教派協力を推進すべきである、と述べている。<sup>(139)</sup> ストージの構想は日本人クリスチャンの教派協力(合同)運動を考えるとときの出発点なのである。

こうした教派協力運動は伝道団の設立で隆盛期を迎え、その後は分散化していくが、第二次大戦後もこうした教派協力団体は大きな役割をもち、今日も北カリフォルニア日系キリスト教会同盟(Northern California Japanese Church Federation)、南カリフォルニア日系キリスト教会連盟(Southern California Japanese Christian Church Federation)として教派協力による活動を続けている。一方、教会合同運動は伝道団設立と平行して一九一〇年代になって急ピッチで進み、一九一三年から一四年にかけて教会合同の骨子が出来、一九一四年にサンフランシスコに日本人合同教会が設立されるのである。この合同教会設立がきっかけとなって各地に教派合同の日本人教会が設立されることになる。この問題については別稿で論じる。ストージは日本人の教派協力(合同)の草分けといつてよい。そして日本人教会の形成・展開をとらえるためにはアメリカ人教役者の役割を無視できないのである。

次に、キリスト教と民族性にとってである。既述したように「世紀転換期」のアメリカ・プロテスタントの日本人移民への対応は、日本人のキリスト教化(＝文明化)、アメリカ化、同化をモットーとしてきたが、現場で日本人伝道にあたっているアメリカ人教役者の基本姿勢はそれほど単純ではなかった。キリスト教化とアメリカ化そして同化という言葉のさし示す意味の微妙な差異が現場ではたいへんな隔りとなっていたのである。本稿はストージを典型例として取り上げたが、このことでわかったことは、なるほどストージは日本人のキリスト教化に専心し、日本人のアメリカ化をも唱えた事があったが、彼はそう唱えながら実践活動の中では早くから教派合同による日本人伝道、それによる一大日本人教会及び日本人伝道局の設立を訴えた。彼のいう教派合同とは日本人が教派の伝道局から自給独立して日本人による日本人のための伝道を実現するための必要条件であった。それによって日本人の国民的、民族的教会を設立しようとした。ストージの考える日本人のキリスト教化とは独立自給の日本人民族教会を建て、日本人自身が同胞伝道に責任を持つことによって可能になるのであった。もし彼の考えが実現した場合、日本人教会は教派と接触

をもたなくなることによってアメリカ社会とのつながりが切れ、日本人のみによる分離独立教会ができることになる。こうした単一民族教会は同一民族意識によって共同体が形成され、排他的な団体になる可能性すらある。ストーリーは日本人民族教会の形成を長いアメリカ社会での歩みの中での過渡期的現象とはとらえず、それを最終目標とみた。つまり、日本人のキリスト教化を日本人の民族性の積極的な維持、存続の中に見いだしていたことになる。アメリカ・プロテスタントの日本人を含む移民伝道を考える際にこうした教会形成の姿勢が存在したことと事体を是非、認識しておかねばならない。すでに何人かの研究者によって指摘されているとおり、教派から分離された日本人民族教会は日本人同士の連帯、共同意識、民族性を高めることになったのであり、ストーリーの日本人伝道の実践はその日本人分離教会の設立を目指していたのである。当然、ストーリーをつき動かしていた根源とは何であったのか、稿を別して論じねばならないだろう。また、こうして練り上げられ、準備された日本人教会合同案が歴史上どのようにして実現して行ったのであろうか、またその経過におけるストーリーの役割はどうであったのだろうか。そして実現した合同教会はストーリーが目指す教派伝道局から全く独立自給した日本人民族教会となり、日本人の民族性維持・存続に貢献していたのであろうか。これらの問題に就いても別稿で取り上げる。

#### 注

- (1) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントと日本人移民」(『キリスト教社会問題研究』三八号、一九九〇年)。
- (2) John Modell, *The Economics and Politics of Racial Accommodation: The Japanese of Los Angeles 1900-1942* (Urbana: University of Illinois Press, 1977), p. 78.
- (3) キョーリックサンドラ C. Taylor, *Advocate of Understanding: Sidney Gulick and the Search for Peace with Japan* (The Kent State University Press, 1984) でカリフォルニアの排日問題への対応が述べられている(例 pp. 78-89)。この中で、キョーリックが日本人はアメリカ社会に同化できることを指摘したことは挙げられているが、



ギョーリックがキリスト教と同化との関係をどうとらえていたかについては特に述べられていない。

- (4) 北加基督教教会同盟編『幻は消えず』(一九六二年)、九六ページ。

- (5) 柏村桂谷『北米踏査大観上巻』(一九一〇年)にはストージの関わる基督教青年会に対して献身的に働いたこと、またストージの人格に多くの日本人が感化を受けた事について言及し、以下のように言及する(三五五ページ)。

日本青年の此会(青年会—吉田)に出入して、ストージ博士の感化を受けたもの少からず、此会は純然たる基督教的の教育的団体にして、ストージ博士が此会のために、投じたる資産は、優に四万弗を越ゆるなるべし、博士は品性極めて高潔にして、夙に身を日本人の感化事業に投じ、殆んど之を以て自己生涯の事業とせるものゝ如し、左れば会員にして博士の訓陶を受けたる者、皆其徳の高きを称せざるはなく……

- (6) ストージの伝道活動について言及したものは次のようなものがある。

出版はなれていないが、Laurence N. Tonomura, "Building An Analytical Tool: Perspectives into the Altruistic Model of Helping Behaviors" (unpublished paper, U.C.L.A., n.d.) はストージの "empathic character and love" が日本人に及ぼした影響について論じているが、日本人伝道への歴史的、社会的影響とその評価については資料的な限界もあって分析できていない。

Sumio Koga, "Dr Ernest Adolphus Sturge" in "A Centennial Legacy": *History of the Japanese Christian Mission in North America, 1877—1977 Volume I* (Chicago: Nobart, Inc, pp.28—29) はストージの人間像、日本人との関わりについての簡単なスタッチをのべている。Christ United Presbyterian Church, *The Church's One Hundred Years In The Japanese American Community* (San Francisco, 1988) はサンフランシスコ日本人合同長老教会の展開の中でストージが果たした様々な役割のみに限定して描いている。これらはいずれもストージの歴史的評価にまで達していない。

- (7) 宮崎小八郎『ストウシ伝』(一九三五年) 参照。

- (8) Lawrence N. Tonomura 論文参照。

- (9) 拙稿「初期カリフォルニア日本人とキリスト教」参照。

- (10) Sturge's Letter to F.F. Ellinwood, January 3, 1886 (Presbyterian Church Office of History [PCOH] 所蔵)。

- (11) Ibid.

- (22) Sturge's Letter to Ellinwood, April 2, 1886 (PCOH).
- (23) Sturge's Letter to Ellinwood, February 4, 1886; Ellinwood's Letter to Sturge, February 17, 1886 (PCOH). ヤキ  
ニクノ堅クハナシ George Sturge, Esq., Woodhorpe, Sydenham Hill, London S. E., England シユウイツキネ (Ellin-  
wood's Letter to Sturge, February 19, 1886, PCOH)。
- (24) Loomis's Letter to Ellinwood, May 3, 1886 (PCOH).
- (25) Sturge's Letter to Ellinwood, May 21, 1886 (PCOH).
- (26) Ellinwood's Letter to the Korea Mission, November 17, 1885; Ellinwood's Letter to Sturge, November 24, 1885  
(PCOH).
- (27) Sturge's Letter to Ellinwood, June 9, 1887; Loomis's Letter to Ellinwood, June 14, 1886 (PCOH).
- (28) J. Carrington's Letter to Ellinwood, July 27, 1885 (PCOH). キタ「米國桑港」『福音新報』一八八五年八月二六日)  
ヲ参照。
- (29) A. J. Kerr's Letter to Ellinwood, April 16, 1886 (PCOH).
- (30) Ellinwood's Letter to Sturge, July 6, 1886 (PCOH).
- (31) "Japanese, S. F., *The Occident*, April 20, 1887 (San Francisco Theological Seminary [SFTS]) 所載); Japanese  
Young Men's Christian Association (Ibid.). キタ「桑港通信 在米國桑港一信徒」『基督教新聞』一八九〇年二月一四  
日) ヲ参照。
- (32) Presbyterian Board of Foreign Missions, *Annual Report*, 1890, p. 71; 1891, p. 64 (シカゴ PBFM AR ニ見ル  
SFTS)。
- (33) 拙稿「初期カリフォルニアの日本人とキリスト教」参照。
- (34) Carrington's Letter to Ellinwood, July 27, 1885 (PCOH); San Francisco Presbytery, *Minutes* (SFTS). キタ「米  
國桑港」『福音新報』一八八五年八月二六日) 参照。
- (35) PBFM, AR, 1923, p. 4 (SFTS).
- (36) キンソンはメソジスト派中国宣教師として一〇年間働いた後、一八六八年六月にカリフォルニア年会から中国人伝道の宣  
教師として任命を受ける。キンソンは各地に日曜学校を建て、中国人がアメリカ社会に適応し、アメリカ人から尊敬される

よう努力した。中国人排斥が起こると、こうした排斥はアメリカ建国の精神に反するとして彼は中国人を弁護した。

その後も一八八四年一月に辞任するまでキリスト教信仰に立って中国人のアメリカ社会への同化を説いた (Ours Gibson, *The Chinese in America*, Cincinnati: Hitchcock & Walden, 1877)。ギブソンは一八七〇年にワシントン街九一六に中国人伝道館を建てるのであるが、ここで美山貫一 (初代の日本人教会牧師) その他の日本人が定期的に集会をもつようになる。ギブソンは日本人達に聖書を教え、こうして生まれた日本人クリスチャン達が福音会を設立する事になる (初期の部A)、『福音会沿革史料』U・O・L・A所蔵)。

- (27) California Annual Conference, Methodist Episcopal Church, *Official Minutes*, 1885, p. 30 (Pacific School of Religion, Berkeley, California [PSR] 所蔵)。

ハリスは一八四六年七月にオハイオ州ビルスビルに生まれる。南北戦争参戦後、一八六九年にペンシルバニア州ミードビルにあるアレゲーニ大学で学び (その後一八八〇年に M.A.、一八八七年 D.D.、一九〇四年 L.L.D. を取得)、牧師になった。一八七三年にフロラと結婚し、メソジスト派の宣教師として函館に行き、五年間そこで働く。ハリスが函館にいたときに新渡戸稲蔵、内村鑑三などを授洗する。ハリス夫妻には子供が一人あったが、一八七七年に生まれて間もないわが子をなくす。子供の事もあってハリス夫人は体調を崩したため、ハリスは一八七八年に東京教区に移り、カリフォルニアの日本人伝道部総理として任命を受ける。そこで働く (Julius Soper, "A Tribute," read by request before the Los Angeles Methodist Preachers Meeting on June 6, 1921 to Bishop M. C. Harris, D.D., L.L.D., United Methodist General Commission of Archives and History, New Jersey 所蔵)。

ジョーンソンはニューヨーク州のオールド・シティに生まれる。彼は一八七六年にクリスチャンになり、ドリュー神学校を一八八三年に卒業し、ペンシルベニアの一教会の牧師となる。同年彼はメソジスト派の宣教師として長崎に行き、その同派神学校で三年間校長として働き、その後青山学院大学の教務部長になる。一八九八年以降は南日本年会の長老司として働き、一九〇四年にハリスが在米日本人伝道部総理をやめた後、後任となる。ジョーンソンは一九二五年一月二十四日に死去する。彼は日本人のために働く ("Rev. Herbert Buell Johnson, Ph.D., B.G.", *California Christian Advocate*, August 4, 1904, (以後 CCA に置換, PSR); *Pacific Japanese Mission, Methodist Episcopal Church, Official Journal*, 1925, pp. 87-89 (以後 PJM, MEC, *Official Journal* に置換, Graduate Theological Union [GTU] 所蔵)。

- (88) PJM, MEC *Official Journal*, 1907, p. 29 (GTU)。

(29) ポンドはマサチューセッツ州ケンブリッジに生まれる。彼の父はメインのバンゴラ神学校の教授(後に校長)であった。

ポンドはボードウィン大学を卒業し、トーマス・アカデミーでしばらく教えた後、三年間バンゴラ神学校に学ぶ。ちょうど彼が神学生であったとき外国伝道宣教師になる召命を感じるが、外国語で説教をしなければならぬために躊躇する。神学校卒業の二カ月前に彼は内国伝道局からカリフォルニア伝道の招聘を受ける。そのときポンドは「これこそ自分への召命である」と確信する、というのは外国語は要求されないが、当時カリフォルニアはフロンティアであり外国伝道と殆ど同じようなむずかしさがあった。

ポンドは会衆派と長老派の「ニュー・スクール」が協力しているアメリカ宣教協会(A.M.A.)によってサンフランシスコに派遣され、当地のグリーンウィッチ教会その他の教会で牧会する。一八六八年にポンドはサンフランシスコ第三会衆教会の牧師となり、教会の近くにある工場に雇われている中国人のために日曜学校を開始する。翌年アメリカ宣教協会は一八五三年に開始したものの廃れていた中国人伝道を復興し、こうしてできた新しい中国人伝道部の総理としてJ・キムボール(John Kimball)が赴任する。キムボールはポンドに中国人のための日曜学校と並んで夜学校を始めるよう提案する。ポンドは中国人を回心させるためにできるだけの努力をしたが、それは決して中国人自身にとっても教会にとってもたやすい事ではなかった。やがて教会内で回心した中国人の会員としての受け入れが大問題となる。会員中他人種と教会生活をともしたくない人々はポンドの中国人伝道に反対した。ポンドはそれでも中国人を受洗させ、教会を辞職して新たに中国人のためのヘサニー日曜学校をつくった。その後一八七三年二月になって彼はヘサニー教会を設立する。同年彼はアメリカ宣教協会が中国人伝道をやめるという決定に反対し、キムボールの後任として中国人伝道を指揮する位置につく。ポンドは一八七六年三月九日にカリフォルニア中国人伝道部秘書(後に総理)に選ばれる(William C. Pond, *Gospel Pioneering: Reminiscences of Early Congregationalism in California, 1833—1920*, Oberlin, 1921)。

(30) "Action of the California Oriental Mission on the Reconsideration of Dr. Pond," *The Pacific*, May 13, 1914 (PSR).

(31) "Japanese Mission, 1010 Pine Street, San Francisco," *Pacific Churchman*, March 15, 1901 (以後 PC に記す、GTU 所蔵); "Japanese Mission, PC, May 15, 1908.

(32) "Annual Meeting Board of Home Missions," *Reformed Church Messenger*, July 21, 1921 (以後 RCM に記す、Eden Theological Seminary, St. Louis 所蔵)。

- (33) "Our Home Mission Work in 1912," RCM, November 7, 1912; "Home Mission Letter," *Ibid.*, April 23, 1914.
- (34) "History of St. Francis Xavier Mission," *The 75th Anniversary, The Diamond Jubilee of St. Francis Xavier Mission, 1913-1989* 参照。
- (35) 「加特立教徒の大運動」『新世界』一九一三年七月三〇日「三ページ」。パリ宣教会はローマ・カトリックの宣教組織として一六六〇年に設立された。宣教会の目的は宣教地に司祭を送り、当地出身の聖職者を養成する事であった。この会は極東地域で活躍した。
- (36) 「加特立教日本人教会」『新世界』一九一三年九月二日「三ページ」。
- (37) 「加特立日本人幼稚園」(同、一九一四年九月二日「三ページ」)。
- (38) 拙稿「初期カリフォルニア日本人とキリスト教」。
- (39) 一九一三年度の「加州日本人基督教教会統計」『新天地』一九一四年一月「七ページ」によると、当時の教派別日本人教会数は以下の通りである。メソジスト(一五)・長老(一〇)・組合(一〇)・聖公会(三)・改革(一)・カトリック(一)・南メソジスト(三)・キリスト(一)・ペンデ(一)・ユニオン(三)・ナザレン(一)・ユニテリアン(一)・アライアンス(一)。
- (40) S. Hata, S. Satow's Letter to A. W. Halsey, June 15, 1920 (PCOH). 「ストーヂ博士の恩恵」『新世界』一九一八年八月三一日)でもストージが山中部伝道のために自らの財布から資金を出したとある。
- (41) Sturge's Letter to A. W. Halsey, June 8, 1920 (PCOH).
- (42) S. Hata, S. Satow's Letter to A. W. Halsey, May 14, 1920.  
長老教会の伝道局はストージの働きを十分評価していた。彼を辞めさせるつもりはなかった(Halsey's Letter to S. Satow, May 29, 1920)。結局ストージと日本人とで理解合致、彼が総理を続けることがはじきらとす。(S. Hata, S. Satow's Letter to Halsey, *Ibid.*)。ストージは日本人伝道部が外国伝道局から内国伝道局に移籍する一九二二年まで総理の地位に留まることになる。
- (43) 「太平洋沿岸日本人連合会記録」一八九九年(Pine United Methodist Church, S. F. 所蔵)。
- (44) 「米国太平洋沿岸組合教会総会」『基督教世界』一九一〇年一月二七日。「同」『福音新報』一九一〇年一月二〇日)。
- (45) 同。
- (46) 同。

- (47) 「伝道団年報」(『新天地』一九一五年二月、八ページ)。
- (48) 「教勢」(『新天地』一九一三年三月、九ページ)。
- (49) 「巡回伝道」(『新天地』一九一三年六月、五ページ)。尚、一九一三年度「伝道団年報」によると、一九一三年五月よりメソジスト、長老、会衆三派伝道局から補助金の申込があり、年末に南メソジスト派も「之に加われり」とある(『新天地』一九一四年一月、一ページ)。
- (50) 「米人各派伝道局と伝道団」(『新天地』一九一三年二月、一ページ)。
- (51) PJM, MEC, *Official Journal*, 1913, pp. 45—46.
- (52) *Ibid.*, 1914, p. 29; *Ibid.*, 1915, p. 28.
- (53) 「米人基督教役者の活動」(『新天地』一九一三年六月、四ページ)。
- (54) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントと日本人移民」。
- (55) すでに坂口論文でその骨子が紹介されているので省略する。
- (56) 「九六四二暗、牧野外務大臣宛、沼野総領事代理発、大正二年五月一六日」(外務省外交史料館)をも参照。
- (57) 同。
- (58) 「伝道団年報」(『新天地』一九一四年一月、一ページ)。尚、ガイについては拙稿「カリフォルニア・プロテスタントと日本人移民」で紹介した。
- (59) 年会準備委員編『在米日本人長老教会歴史』(一九一一年)、二二ページ。
- (60) 同、五五ページの役員一覧参照。
- (61) 桑港美以教会『教会記録』(一八九四—一八九七年、Pine United Methodist Church 所蔵)。
- (62) 同。
- (63) J. B. Rust, "The Reformed Church and Missionary Work among the Pacific Coast Japanese," *RCM*, May 5, 1910.
- (64) 「桑港通信在米国桑港一信徒」(『基督教新聞』一八九〇年二月四日)。
- (65) PBFM, AR, 1891, p. 64.
- (66) 「不信なる行動」(『日米』一九〇三年一〇月二五日)。

- (67) Report of the Immigration Commission, *Immigrants In Industries, Part 25: Japanese And Other Immigrant Races In The Pacific Coast And Rocky Mountain States: Japanese And East Indians*, Washington, D.C.: Government Printing Office, 1911, p. 184 (「北米合衆国ニ於テ本邦人渡航制限及排斥一件 十八」, 外交史料館)。
- (68) この記事は『ストウジ伝』(九三〜九五ページ)に引用掲載されたものを用いたが、現物はまだ被閲できないでいる。
- (69) 「植村牧師来桑」、「ストーシ博士伝道二五年記念祝会」(『新天地』一九一一年一月、六〇七ページ)、「長老教会青年会の合併」(『新世界』一九一一年六月六日、三ページ)、「廿五年の功勞紀念会」(同、一〇月二八日、三ページ)、「伝道二十五年記念祝会」(同、一月二日、三ページ)。
- (70) 「会堂建築費募集」(『新世界』一九一一年六月一六日、三ページ)、「青年会の演劇」(同、七月一七日、三ページ)、「青年会の演劇に就て」(同、七月二八日、三ページ)、「新しき劝宣劇」(同、七月三〇日、三ページ)、「慈善演劇第二日目」(同、八月五日、三ページ)。
- (71) 以下のものを参照。「ストーシ図書館開館式」(『新世界』一九二二年一〇月二日、三ページ)、「ス図書館開館式順序」(同、一月三日、三ページ)、「伝道会社とス氏図書館」(同、一月二日、三ページ)、「桑港だより」(『福音新報』一九二三年一月九日)。尚、ストーシ図書館と命名された際、日本人を代表して宮崎小八郎が次のように述べ、ストーシへの感謝の気持ちを表明する。

此の図書館をストウジ図書館と称するを得るは太平洋沿岸に於ける日本人の大に名誉とする所なり此は博士の寛大なる精神と、深厚なる同情とを公衆に示すに於て規模余りに小さく敢て適當なるものと云ふに足らずと雖も生たる記念館たれば今後年と共に成長發展するに至らん」(『新世界』一九二二年二月一日、三ページ)。

又三〇周年記念の際にはカリフォルニア内を巡回する特別伝道を行い、二〇〇人以上の入信者を得たとある(「ストウジ博士伝道三十年記念」、『新天地』一九一六年一月、九ページ)、「ス博士伝道三十年記念伝道」同、一九一七年一月、一一ページ)。
- (72) 「勤勞二十五年慰勞会」(『新世界』一九二二年二月九日、三ページ)、「勤勞廿五年慰勞会」(同、十二月二〇日、三ページ)、「リ氏とス博士の謝状」(同、十二月二日、三ページ)。
- (73) ヘイト会のためのパンフレット(岡繁樹コレクション、U・C・L・A)。
- (74) 「ストウジ会」(一九三三年一月二八日、田村すなお氏所蔵)。

(75) 「長老教会青年会の合併」『新世界』一九一一年六月六日、三ページ。

(76) ヴェールは一八八六年にメソジスト会員になる。彼はニンントン神学校を卒業後、ドイツ南部の州バイエルンで一八七四年に米国副領事として赴任する。ヴェールと教育は切っても切れない。彼は一八七七年にボストン大学で更に勉強した後、オハイオ州立大学の Preparatory Department の校長として働く(一八七七〜七九年)。一八七九年に日本にメソジスト派宣教師として派遣され、横浜の同派神学校長として(一八八三〜八四年)、東京の青山学院大学教授として(一八八三〜八四年)、フィランダー・スミス聖書学院教授として(一八九三〜九四年)、鎮西神学校教授として(一八九五〜一九〇〇年)日本人教育に従事したメソジストである。彼は一九〇二年にサンフランシスコ日本人メソジスト教会の英和学校長として赴任する(PJM, MEC, *Official Journal*, 1911, pp. 11 f.)。

(77) 「博士ハリス師慰労祝賀会の主意及び義損金募集案」『ボ集委員姓名』『喜の音』一九〇一年七月 Pine United Methodist Church 所蔵。

(78) "Reception for Bishop and Mrs. Harris," CCA, June 9, 1904.

(79) 桑港日本人美以教会『教会記録』(前掲)。

(80) "Bishop Harris Dies in Japan," CCA, May 12, 1921; "Bishop Harris: A Recollection," *Ibid.*, May 19, 1921.

(81) "Harris," CCA, October 7, 1909. この記事はクリス夫人にこうして次のように述べた。

"Young men, deprived of home influences and in a strange land, come to her for counsel as to a mother, and sympathetic was entered into their life problems and put new force into their good resolves."

在カリフォルニアの日本人は一九〇九年九月一日にハリス夫人記念礼拝を行った(ハリス夫人追悼記念会、『新世界』一九〇九年九月一日、三ページ)。一方徳富蘇峰の書いたハリス夫人の回顧が「ハリス夫人に就て」(『新世界』一九〇九年一〇月四日、一ページ)に掲載された。

(82) "Rev. H. B. Johnson, D.D." CCA, February 12, 1914.

(83) PJM, MEC, *Official Journal*, 1912, pp. 17, 47; 1918, p. 18. また「シモン総理記念伝道」『新世界』一九一七年一〇月一九日「三ページ」。「シ博士記念伝道」(同、一〇月二十六日「九ページ」)。「記念祝賀伝道」(同、十一月八日「六ページ」)。「伝道記念祝賀会順序」(同、十一月九日「六ページ」)。「三十記念祝賀会」(同、十一月三日「九ページ」)。「シモン総理記念伝道会」(同、十一月五日「七ページ」)。



- (84) "Japanese Mission, 1010 Pine Street, San Francisco," *PC*, March 15, 1901.
- (85) "The Japanese Mission," *PC*, October 1, 1903.
- (86) "Japanese Mission," *PC*, May 15, 1908.
- (87) "Japanese Mission," *PC*, August 1, 1905.
- (88) "Japanese Mission," *PC*, May 15, 1908.
- (89) "Japanese Mission," *PC*, August 15, 1910.
- (90) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントの教派協調運動と日本人合同教会の設立」(『キリスト教社会問題研究』三七号、一九八九年)。
- (91) 同。
- (92) *PJM, MEC, Official Journal*, 1906, p. 10.
- (93) 桑港美以教会『教会記録』(一九〇三―一九一一年) 参照。
- (94) 教派合同による教会雑誌発行については「教会雑誌合同の議」(『新世界』一九〇九年八月四日、一ページ) 参照。『独立』については『長老教会歴史』(四四―四六ページ) 参照。
- (95) 『長老教会歴史』四六、八三―八八ページ。ストージのこの文章は同年一月四日付の書簡に同封されていたという。
- (96) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントの教派協調運動と日本人合同教会の設立」参照。
- (97) 桑港美以教会『教会記録』(一九〇三―一九一一年)。
- (98) 同。
- (99) 『教会記録』(前掲)。また「基督教同盟の決議」(『新世界』一九〇九年二月八日、三ページ)。
- (100) 『教会記録』(前掲)。また「北加基教々役者会」(『新世界』一九一〇年一月二五日、三ページ)。
- (101) 『長老教会歴史』三二ページ。
- (102) 「基督教徒同盟伝道団」(『新世界』一九一二年四月二八日、三ページ)、「基督教伝道団発会式」(同年五月三日、三ページ)。
- (103) 「北加基督教同盟臨時会」(『新世界』一九一一年九月四日、三ページ)。
- (104) 「伝道団報」(『新天地』一九一一年一月、六ページ)。

- (105) 大久保真次郎「舊カ年の回顧」『新天地』一九二二年六月、四ページ。
- (106) 「伝道団報」『新天地』一九二二年七月、六ページ、「伝道団の演説」『新世界』一九二二年六月二日、三ページ、「基督教大演説会」(同年六月四日、七ページ)、「基督教各派聯合大演説会」(同年二月四日、三ページ)。
- (107) 「伝道団報」『新天地』一九二二年一月、六ページ。
- (108) 「伝道界の新現象」『新天地』一九二二年二月、三ページ。
- (109) 拙稿「カリフォルニア・プロテスタントの教派協調運動と日本人合同教会の設立」。
- (110) 「第三回伝道団評議員会附基督教伝道団年会」『新天地』一九二三年二月、六ページ。
- (111) PBEM, AR, 1914, p. 196.
- (112) 「聖書献上」『新天地』一九二五年五月、一〇ページ。同年七月三〇日開かれた伝道団定期理事会で「聖書捧呈につきストウデ博士及び宮崎小八郎氏を捧呈委員に選定す」ることを決めた。
- (113) 「伝道団報」『新天地』一九二五年八月、九ページ。
- (114) 「聖書奉獻」『新天地』一九二五年一月、二ページ。尚、ストージの「聖書献上」については「聖書献本式」(『新世界』一九二五年七月三十一日、三ページ)、「昨日の聖書献本式」(同年八月二日、三ページ)、「聖書献上許可」(同年八月二十九日、三ページ)、「ストージ博士着期」(同年九月四日、七ページ)、「The Mission of the Rev. Dr. Sturge to Japan, "The Pacific, December 1, 1915; "The Bible and the Japanese," Ibid, February 3, 1916 など参照。
- (115) 「教役者大会順序」(『新世界』一九二一年二月一八日)、「教役者大会の二日目」(『新世界』一九二一年二月二八日)。
- (116) 「教役者会の三日目」(『新世界』一九二一年三月三日)、「北加教役者大会決議」(『新世界』一九二一年三月四日)。
- (117) 「常置員会」『新天地』一九二二年六月、一二ページ。
- (118) 「伝道団報」『新天地』一九二二年七月、六ページ。
- (119) 「第三回常置員会」『新天地』一九二二年一〇月一日、六ページ。
- (120) 「常置員会」『新天地』一九二三年二月、六ページ。
- (121) 「伝道団常置員会」『新天地』一九二三年六月、六ページ。
- (122) 「米人教役者と懇談会」『新天地』一九二三年六月、六ページ。
- (123) 今井三郎「米国日本人基督教教会合同委員会に就て」(『新天地』一九二三年一〇月、七ページ)、「米国日本人基督教教会合同

委員会」(『基督教世界』一九一三年一〇月三〇日)。「米国加州に於ける日本人教会の合同」(『福音新報』一九一三年一〇月三〇日)。

(124) PJM, MEC, *Official Journal*, 1913, p. 37. この問題に関してはM・ウィールも教会合同反対の意見を述べた。“The Pacific Japanese Mission,” CCA, October 8, 1914 では彼は次のように述べている。

“while Christian ministers spend their time on the Committees on Organic Union, trying to write a new creed and new Church politics, the devil laughs, because active and aggressive religious work comes well nigh to a stand still. Out of an experience of over thirty years in the work, the writer is convinced there is nothing to be gained in building up the Spiritual Kingdom of God, by forced and unactual Organic Church Unions.”

(125) 今井三郎「米国日本人基督教教会合同委員会に就て」(前掲)。また「基督教教会合同委員会」(『新世界』一九一三年九月二〇日、三ページ)。「基督教合同委員会」(『日米』一九一三年九月二〇日、三ページ)も参照。

(126) 小平国雄「教会合同と時代精神」(『新天地』一九一三年一〇月、一ページ)。

(127) 「教会合同の協議」(『新世界』一九一三年一〇月七日)。「教会の合同」(『日米』一九一三年一〇月七日、三ページ)。

(128) PJM, MEC, *Official Journal*, 1914, pp. 14—15. また「美以教会部会決議文」(『新天地』一九一三年十二月、二ページ)。

(129) 『長老教会歴史』四三—四四ページ。

(130) 「在米日本人組合教会総会」(『福音新報』一九一三年七月三日)。

(131) 「羅府に於ける組合長老両派の年会」(『新天地』一九一四年六月、一〇ページ)。「長老教会年会報告」(一九一四年度 Westview Presbyterian Church, Watsonville 所蔵)。

(132) 「羅府に於ける組合長老両派の年会」(前掲)。「在米日本人組合教会第五回年会概況」(『基督教世界』一九一四年六月一八日)。

(133) 「桑港日本人基督教教会の組織顚末」(『伝道者』一九一四年一〇月一五日、三ページ Christ United Presbyterian Church 所蔵)。

(134) 「桑港日本人基督教教会の組織顚末」(同上)。

(135) 「年会記事」(『新天地』一九一四年二月、九ページ)。

(136) 「在米日本人基督教教会同盟憲法草案」(『新天地』一九一四年二月、九ページ)。

- (137) 「伝道団報」『新天地』一九一四年三月、一〇ページ。
- (138) 「第六回在米日本人組合教会総会議事概要」及び「沿岸長老教会年会」『新天地』一九一五年六月、一〇ページ、「第七回日本人組合教会総会」及び「沿岸日本人長老教会年会」『新天地』一九一六年六月、九ページ。
- (139) E. A. Sturge, "Success and Failures in the Evangelization of Orientals" in Home Missions Council of Women for Home Missions, "Oriental Mission Work — On the Pacific Coast of the United States of America" (October, 1920, PCOH).